

42335

教科書文庫

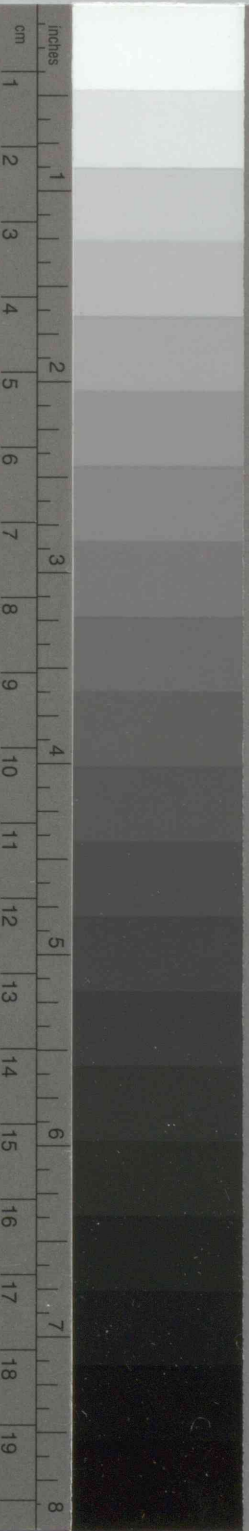
4
8/0
42-1936
2000.0 65661

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



4b
810
BB11



文部省檢定濟

高等女子學校國語教科書 昭和十一年二月五日

女子國文新編

第三版



垣內松三編

東京高等師範學校教授

4b  
810  
B11

一 國民文化と國語教育との關係を基本として國民精神の涵養を意圖しました。

二 教材の選擇については特に文章の本質と學習指導の方法とを考慮しました。

三 縦に學年を貫き横に學期を連ねて組織的及び圓周的に教材を排列しました。

四 右編纂の大綱の外本書に關して必要なる事項は別に趣意書に詳記しました。

目次 (卷三)

一	結晶の力	島崎藤村	四
二	峠の茶屋	夏目漱石	一〇
三	草の匂	前田夕暮	一五
四	お遍路さん	荻原井泉水	二六
五	新緑	五十嵐力	三三
六	電報	下位春吉	三七
七	巨象のやうに	白鳥省吾	三九
八	修善寺行	吉田絃二郎	五五
九	菅公夫人	山田新一郎	七〇
一〇	小品二題	薄田泣菫	六六
二	ギリシャの旅	安倍能成	六八

三	風鈴	大谷繞石	六四
三	雲のいろく	幸田露伴	六九
四	アイヌの部落	金田一京助	一〇五
五	盆燈籠	饗庭篁村	一一八
六	入江の奥	若山牧水	一二四
七	展望車と機關車	東郷實	一三三
八	母へ	野上彌生子	一三五
九	華	友松圓諦	一四七
一〇	陶磁器の美	柳宗悦	一五〇
一一	森の繪	吉村冬彦	一五九
一二	箱根路	正岡子規	一六五

附録 語釋

常用漢字表

一 結晶の力

島崎 藤村

十七八歳の頃、私は隅田川でよく泳いだことがある。全く水には経験のなかつた私も、漸く岸を離れることが出来るやうになり、次第に川の中流までも進み得るやうになつて、一夏水泳場へ通ふうちに向うの河岸まで泳ぎ越すことが出来た。更にまた一夏泳いで見たら、焦つて水ばかり飲んで居た頃によくも分らなかつた水瀬の速い遅いもわかつて來たし、眞水と潮流の混り合つたあの川の中の冷たいと温いともわかつて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の光景を泳ぎながらに見ることも出来た。板子なしには溺れる外はなかつた私も、二夏の末には優に隅田川を往復した。私は

島崎藤村 名は春樹。文學者。明治五年生。  
隅田川 東京の東部を貫き東京灣に注ぐ。流域二百八十軒餘。河幅の最廣所は二百四十餘米。  
「水には経験のなかつた私」

普通の泳ぎ手が行けるところ迄は、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなかく、容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出来る人を見たり、拔手の上手な人などを見た時は、全く感嘆してしまつた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして根氣さへあれば、そこまで行くことは決して難くないに相違ない。

信州の小諸に居た頃、私は弓をやつたことがある。誰でも最初のうちは、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。唯當りさへすればよい。さういふ時代には、幸ひに一本の矢

「文章の道にも」

小諸 長野縣北佐久郡の町。  
小諸に居た頃 明治三十二年（作者二十八歳）より明治三十九年迄。

が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひもよらぬ場所へ飛  
いで行く。射手の心に頼むところもなく、矢の曲直を辨別す  
る力もなく、さうして幸ひに當つた矢は、高慢な煩はしい熟練  
を思はせるばかりだ。小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心  
得のある老人が私達の矢場へ來た。その老人が先づ姿勢を  
正すことを私達に教へてくれた。それからの私達の矢は、た  
とひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同  
じ場所を行くやうになつた。

これは文章の道にも當筋めて見ることが出来る。たゞ好  
い文章をのみ作らうと思つて焦心することは、決して目的を  
達する道でない。眞に好い文章を作らうと思ふものは、どう  
しても先づ自己から正してかゝらねばならない。

「文章の道にも」

「眞に好い文章を作  
らうと思ふものは」

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鋤を執つたことがある。  
讀書のかたはら、よくその鋤をかついで行つて土を耕して見  
た。私は先づ荒れた畠の地面を掘返すことから始めた。土  
を碎いた。小石を擇り分けた。地ならしをした。汗を流し  
てそれらの仕事をした。葱の苗や馬鈴薯の芽のやうな植ゑ  
易いものから作つて見た。その畠には、大根、白菜、茄子、豌豆、胡  
瓜などの類をも植ゑて見た。草を取りに行き、サクをかけたに  
行つた。馬鈴薯の花が白く盛りな頃に行つて、試みに土の中  
を探つて見ると、はや圓いのが幾つもの根元の方から出て  
來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の背よりも高く絡みついた。  
畠の中には、嫩く育つたのを摘む鋏の音が聞えた。粗末なが  
らも自分で作つた新鮮な野菜が、私の食卓に上るやうになつ

サク 鋤で畠を打ち  
かへすこと。さく  
り。

た。それから私は周囲にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で好く整理された畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の身に感じられるやうになつた。私はある畠を通つて非常に嚴肅な念に打たれたことを、今でもよく思ひ出すことが出来る。

われ／＼が文章の手本とすべきものは何程われ／＼の周圍にあつても、それを悟らないことには仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならぬ。「試みる」といふことは、「悟る」といふことの初である。

淺草の新片町に住んだ頃、家は淺草橋や兩國橋に近くて、私はあの隅田川の界限を漕廻つたことがある。最初のうちは

無暗に手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある櫓を前へ押し、手許に引きして骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。次第に私は手足を動かすことが少なくて、身體全體の力で、ゆつくりと櫓を押すことが出来るやうになつた。向うから大きな傳馬がやつて來たぞ、あれに一つ衝突しないやうに、さう思つて漕いで行く楽しみなどもそれから起つて來た。その後船頭のするところを見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには力の省略がある、簡素の美がある。文章の道にも、無暗に筆を弄することが決して自己の眞の表白とはならない。眞に好い文章には、眞に好い結晶の力がある。

(飯倉だより)

「文章の手本とすべきものは……あつても」  
「試みる」といふことは

淺草の新片町 東京市淺草區の東南部の町。  
新片町に住んだ頃

明治四十年(三十六歳)より大正二年迄。  
淺草橋 神田川(隅田川に注ぐ)に架す。  
兩國橋 隅田川に架す。

「文章の道にも」  
「結晶の力」

二 峠の茶屋

夏目漱石

夏目漱石 名は金之助。文學者。大正五年歿、年五十。

「おい。」と聲を掛けたが返事がない

と、聲を掛けたが返事がない。軒下から奥を覗くと、煤けた障子が締切つてある。向う側は見えない。五六足の草鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらり／＼と揺れる。下に駄菓子の箱が三つばかり竝んで、そばに五厘錢と文久錢が散らばつて居る。

\* 屈託氣

「おい。」と、また聲を掛ける

「おい。」と、また聲を掛ける。土間の隅に片寄せてある白の上にくれて居た雞が驚いて眼をさます。くゝゝゝと騒ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる。其の上に、眞黒な茶釜がかけてある。幸ひ

\* 今しがた

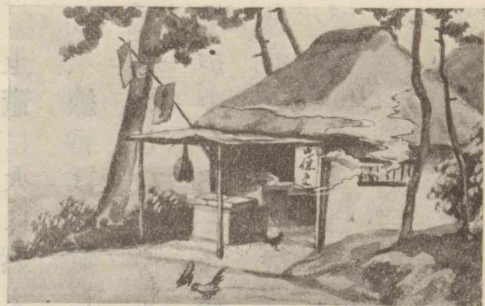
下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷でずつと這入つて床几の上に腰を卸

「ずつと這入つて床几の上に腰を卸した」

「雞は羽搏きをして……」

した。雞は羽搏きをして臼から飛下りる。今度は疊の上にあがつた。障子が締めてなければ奥まで駈けぬける氣かも知れない。雄が太い聲で、こけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけけつこつこと云ふ。まるで人を狐か狗のやうに考へてゐるらしい。床几の上には一升枧程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香が、日の移るのを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つて居る。雨は次第に収る。しばらくすると奥の方から足音



「一升枧程な煙草盆が閑靜に控へて、中にはとぐろを捲いた線香」

\* 燻る



がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

「煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。」

どうせ誰か出るだらうとは思つて居た。土竈に火は燃えて居る。菓子箱の上に錢が散らばつて居る。線香は吞氣に燻つて居る。どうせ出るには極つてゐる。しかし自分の見世をあげ、放しても苦にならないと見える所が、少し都とは違つてゐる。返事がないのに、床几に腰をかけていつ迄も待つてゐるのも、少し二十世紀とは受取れない。

「どうせ出るには極つて居る。」

「お婆さん、此處を一寸借りたよ。」

「はい、是は一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎な御天氣で、嘸御困りでござんしよ。おうく、大分御

濡れなさつた。今火を焚いて乾かして上げましょ。」

「そこをもう少し燃しつけてくれ、ば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と、立ちあがりながら「しつ、しつ」と二聲で雑を追下ろす。こゝと、と駈けだした雌雄は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を踏みつけて往來へ飛びだす。

「しつ、しつ」と二聲で雑を追下ろす。」

「まあ一つ。」

「まあ一つ。」と、婆さんはいつの間にか剝拔盆くわきぼんの上に茶碗をのせて出す。茶の色の黒く焦げて居る底に、一筆がきの梅の花が三輪、無造作に焼きつけられてある。

\*無造作

婆さんは袖なしの上から襷をかけて、土竈の前へうづくまゐる。自分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顔を寫しな

がら話をしかける。

「閑静でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「え、毎日のやうに鳴きます。此の邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎今日は先刻の雨で何處へか逃げました。」

折柄土竈のうちが、ぱち／＼と鳴つて、赤い火が颯と風を起

して一尺あまり吹出す。

「さあおあたり。無御寒かる。」

と言ふ。軒端を見ると、青い煙が突當つて崩れながらに、微か

な痕をまだ板庇にからんで居る。(草枕)

「さあおあたり。無御寒かる」と言ふ。

「青い煙が……板庇にからんで居る」

三 草の匂

前田 夕暮

前田夕暮 名は洋造、歌人。明治十六年生。

今日も、私は白いお握りと、ゆで卵と、落花生とを持って向うの林に行く。

巴旦杏の木の立つてゐる——其の枝にはもう青い果がな

つてゐる——村の小學校の庭を横切つて、往還へ出る。この

村はどこへ行つても杉木立と桐畑とである。桐は今花ざかり

だ。

往還を荷車を挽いて行く若い男がある。車の上には新し

い蓆を敷いて、一人の老爺が乗つてゐる。顔を上に仰向けて、

道のはたの桐の花を褒めながら、大きな聲で何か話し／＼行

く。挽いてゐるのは息子で、乗つてゐるのは父親であること

巴旦杏 薔薇科の喬木。

\* 往還

「大きな聲で何か話し話しく」

がわかる。  
 「今日は、よいお天気だ……。」と老爺がいふ。  
 全くよいお天気だ。畑には麥が青く穂立ち、その麥畑のなかに桐の花が咲誇つてゐる。向うを見ると、赤い屋根が林間にぼつり／＼建つてゐる。

道は少し下りになつて田圃に出る。田圃には紫雲英が咲盛つてゐる。狐の牡丹や、きんぼうげが光つてゐる。すかんぼが赤く穂を出して、風に吹かれてゐる。苗代田には水が見るから心地よく張られて、案山子がぼつんと立つてゐる。

田川の橋を一つ渡ると、其處に櫟の竝木がある。其の竝木路をぼつり／＼と歩いて行くと、道は檜と杉と樺との古い森にはひる。其の森のなかには細い幽かな道が、木の枝のやう

に分れてゐる。どの道を辿つて行つても、人の家の庭に出られる。庭にはよく地車が挽きすててゐる。鶏がきよと／＼と遊んでゐる。

庭の隅の日あたりには、苗場があつて、甘藷苗や、茄子苗が盛上つてゐる。胡瓜苗はもう麥畑の畝間に移植されて、黄いろい花をつけてゐる。道は杉の植林のなかを通つてゐて、いよいよ幽かになる。孟宗藪のそばを通つて少し行くと、急に明かるくなつて、視野が潤くなる。其處には可なり広い草原が横たはつてゐる。草原には、もう野薔薇が咲きかけて、風にゆられてゐる。すい／＼と茅花が青く抽きでてゐる。なかには白く穂を出してゐるものもある。空には雲雀が鳴いてゐる。あたりは一面の麥畑である。麥畑の向うに孟宗竹が青

紫雲英 豆科に属する草木。

狐の牡丹 毛茛科の有毒植物で多年生草本。莖の高さ〇・七—一米。春より夏にかけて黄色の實を結ぶ。

すかんぼ 蓼科に属する植物。すいは。苗代田

案山子がぼつんと立つてゐる」

「ぼつり／＼と歩いて行く」

地車 ちぐるま。重いものを運ぶための車。低くて四輪ある。

\* 畝間

\* 視野

茅花 白茅の別名。ちがや。

黄いろくなびいてゐたり、家の屋根だけ見えたり、墓が四つ五つあつたり、行く人の頬被りが白く見え隠れしたり、若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる。

私は冷たい草の上に腰をおろして、たつた一本生えてゐる

原つばの若木の楡の蔭で、風呂敷を披いて握飯を食ふ。鹽が

少し利きすぎてゐるので、却つてうまいが、一椀の飯を握つた

だけなので、掌にのせてみると、一口に食はれさうである。そ

れを私は少しづつ惜しんで食ふ。そして水筒から番茶の冷

えたのを飲む。雲雀が一つすぐ私の頭の上に鳴いてゐる。

初夏の雲雀の鳴聲は何となく寂しい音色だ。今頃は、大抵の

雲雀は野良から曠野の草山へ移つてゐるのであるが、穂麥の

畝間に、三番卵をでも孵して、つい山に歸りそこねてゐるので

あらう。

私は握飯を食ひ終ると、また歩き出す。草原を横切つて少

し行くと、道が麥畑の畦の所でなくなつてゐる。かまはずに

畦を歩いて行くと、畑と畑との間に、道とも何ともつかず、人の

歩いた跡が一筋幽かに通つてゐる。

その道を歩いて行くと、麥の穂がさや／＼と風に鳴つて、私

の肩や背に觸れる。畑中道にはたんぼ／＼の花が咲きつゞい

てゐる。一株掘つて新聞紙につゝんで抱へて行くと、白く乾

いた往還に出る。往還には一臺の荷馬車の轆の長いのが置

かれてゐる。車の上には黒い野良着に、それでも赤い模様の

ある帯をして、手拭で顔を隠すやうにした若い百姓の女が二

人、足を長く投げだして、何かひそ／＼と話してゐる。

「若葉が燃えあがつてゐたり、林が青く風に吹かれてゐたりしてゐる」

「草の上に腰をおろす」

「惜しんで食ふ」

\* 番茶  
「雲雀が一つ」

\* 三番卵

「人の歩いた跡が一筋幽かに通つてゐる」

「白く乾いた往還」

\* 轆

少し行くと、馬が道のはたで青い麥を食つてゐる。その先には黒い牛が路に立ちほだかつてゐる。麥畑のなかに新しく家を建ててゐる人達が見える。柱が白々と光つてゐる。又少し行くと十字路に出る。露座の石佛が道の端に合掌してゐる。佛の足のあたりには、たんぼ、が黄いろく叢り咲いてゐる。木の葉に載せて何か上げてゐる。四辻の一軒家の障子には「酒さかな」と書いてある。その家の細い道をはひつて行くと、櫟や犬しでの混生林が私を待つてゐる。林には涼しい風が枝を動かしてゐる。私はその林のなかにはひつて、少し疲れたので、草を藉いて横になる。私の顔の直ぐそばに銀蘭が白く動いてゐる。手のところには羊齒がうす紅く若葉を出してゐる。日の光がちら／＼とこぼれて来る。仰い

「柱が白々と光つてゐる」  
「露座の石佛」  
\*露座

犬して 一名そろ。  
到る處の山野に自生する落葉喬木。  
「草を藉いて横になる」

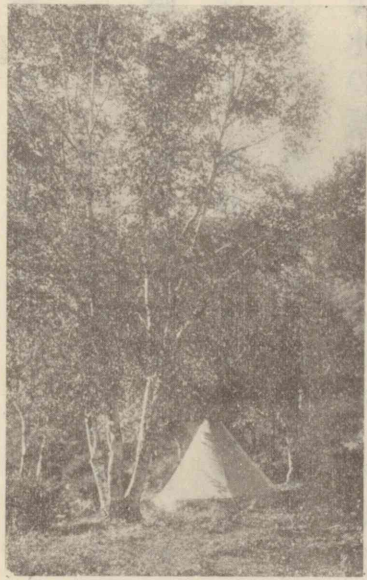
銀蘭 蘭科金蘭屬の多年生草本。莖は高さ約二五種。春白色の花を開く。  
羊齒 羊齒類。莖は地下莖にして毛茸あり、葉は羽狀復葉。うらじろ。  
「日の光がちら／＼とこぼれて来る」

「日のありどころがわかる」

で見ると、犬しでの軟かい若葉を透して日のありどころがわかる。風に梢が揺れる度にちら／＼と光がこぼれるのだが、少しもまぶしくはない。此處で寝ながら、私はまた風呂敷を披いてゆで卵を食ふ。  
林のはづれは野路になつてゐるので、時折人が通るが、私の寝てゐるのに氣がつかない。小娘が大きな青い藥罐を提げて通る。野良へお茶を運んで行くのである。  
私はいつしかよい心持になつて、ついうと／＼眠る、頭の上で木の葉が涼しさうにさゝやいてゐるなと思ひながら。  
二三十分も眠つたらしい、私は自然に眼覺める。手に何か軟かい草の葉が觸れるので、折取つて見ると、蕨である。私は歸りにはこの蕨と羊齒とを掘つておみやにしよう。

蕨 水龍骨科蕨屬の多年生草本。  
おみや お土産。

私は寝ながら色々な空想をする。去年の地震の時に、庭に野宿した涼しさを思ひ出すと、今年の夏は武藏野の林間を家族連れでテント旅行をしようと考える。先づ八畳敷位のテ



ントを一張り買入れる。疊椅子を二脚と、やはり折疊みの出来る卓子を一脚、それに白い毛布が三四枚あれば、それでもうよささうだ。さうさ

う石油ランプ一箇に懐中電燈も要る。食料品は晝間附近の村から買ひあつめれば心配はない。

さて私達は、いよいよ、林間のテント旅行に、一週間位の豫定

で出かける。そして晝間は野を歩き廻る。疲れる頃に日が暮れる。林間にテントを張つて一夜の寢床をつくる。石油ランプと思つたが、提燈の方がよい。提燈に灯を入れて木の枝に吊す。其の下で簡素な晚餐を済ます。子供達は疲れてゐるので、すぐにテントの中にはひつて寝て仕舞ふ。長男の方は二三年つゞけて、學校から箱根の仙石原にテント旅行に行つてゐるので、馴れてゐる。長女の方も今年からは、學校から行けるのであつたが、まだ地震の憂があるので、この夏は一年休むことになつた、といふやうな話をしながら、やがて眠つて仕舞ふ。私もそのそばに寝る。テントの上の本の葉が涼しく風に鳴つてゐる。なに、蚊がゐるだらうつて。さうかな、るほど、蚊が居るかな。少し位なら蚊遣りを焚いて我慢しよ

仙石原 箱根火山の  
火口原。神奈川県  
足柄下郡仙石原村。

「なに、蚊がゐるだらうつて。さうかな、なるほど、蚊が居るかな」

う。どうせ疲れてゐるから、すぐ寝ついて仕舞ふ。  
 朝は早く、空がしら／＼明けになつた頃起きる。無論子供  
 が先づはね起きて、大きな聲で戯れるので、私もすぐ眼を覺ま  
 す。顔は林の出はづれの田圃へ行つて灌漑用水で洗ふか、村  
 に行つて、どうせ飲料水を貰つて來なければならぬから、其  
 の時冷たい井戸水で洗ふことにする。さう／＼、アルコール  
 ランプも一つ必要だ、湯だけは沸かさなければならぬから。  
 村の牛乳屋から買つて來た搾りたての牛乳とパンとで、簡  
 單な朝飯を濟ませる。子供達はクレオンで林間の寫生をは  
 じめる。私は組立椅子と卓子とを持出して、其處で讀書をし  
 たり、手紙を書いたりする。  
 少し歩かうといふので、また林間から林間へ移つて行く。

「すぐ寝ついて仕舞ふ」

\* 灌漑用水

途中でパンやら、卵やらを買つたり、手紙を村のポストへ入れ  
 たりして、何處といふあてもなく、青い草、緑の林を追うて旅を  
 つゞける。さう／＼此のテント旅行には、是非とも犬を同伴  
 する必要がある、彼も家族の一員だから。  
 こんな風に私の空想は果てしなくつゞく。  
 日暮近く、私は両手に抱へきれないほど、林間で掘取つた色  
 色の雑草を抱へて、停車場への通りを急ぐ。私の服の上着も、  
 ズボンも、草の匂がぶん／＼してゐる。

(緑草心理)

「青い草、緑の林を追ふ」

「服の上着も、ズボンも、草の匂がぶん／＼してゐる」

日の光こもりてあつき芝生より羽蟻ひらめきま

ひのぼりたり

(前田夕暮)

### 四 お遍路さん

萩原井泉水

りんくといふ冴えた音が、遙かの山裾から此の山荘にまで聞える。それはお遍路さんが振る鈴の音なのだ。「お遍路さん」とは何といふ親しみ深い言葉だらう。四國八十八箇所に残された、弘法大師の靈場を遍歴して歩くのがお遍路さんである。併し如何に信仰の爲とは云へ、四國を一周することは、日數からも、勞力からも、殊にお遍路さんに多い女の身として大抵のことではないので、四國の代りに、この小豆島にある八十八箇所の靈場を一巡すれば、同じ功德を積み得ることとされて居る。「島四國」といふ言葉も出來て居る。その遍路にしても、女の脚では、六七日かゝると云ふことである。

萩原井泉水 名は藤吉。俳人。明治十七年生。

「りんくといふ冴えた音」  
山荘 香川縣小豆島の或別荘をさす。

\* 四國八十八箇所

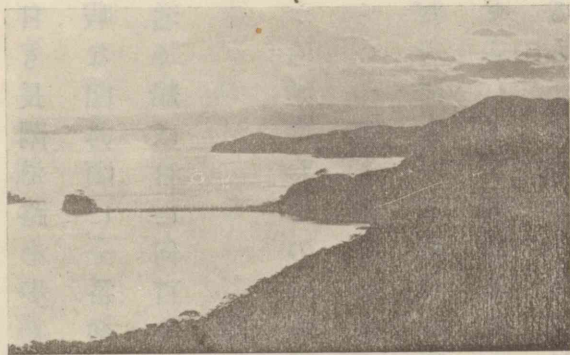
弘法大師 僧空海。眞言宗の開祖。承和二年(西暦846)年六十二。  
\* 遍歴

小豆島 香川縣小豆郡。瀬戸内海の島。面積九百三十八方呎餘。

\* 功德

岡山から若しくは高松から來るお遍路さんは、船で土庄港に着く。そこから發足して、第何番といふ札所の順に參拜の

路を辿るのである。菅笠を被り、裾をからげて、背には手廻りの物を太い紐で負ひ、胸には自分の名を書いた札を入れた札箱を吊して、塔婆形に刻んだ金剛杖を持つて、少ないのは一人二人、多いのは何十人と團體をなして、銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く。それは繪である、美しいことである。この山荘にまで聞えるりんくといふ冴えた鈴の音は、彼等の先達の



小豆島の第一部

土庄港 小豆島の西岸。

札所 巡禮などの參詣する三十三箇所の觀音堂。又は八十八箇所の大師堂。參詣するものが、その證に札を受ける所。

\* 塔婆形

\* 金剛杖

「銀のやうな海の光を浴びながら、海に近い麥畑の中の道を辿つて行く」

\* 先達



が振つて居るものと見える。  
 お遍路さんは時を限らないが、風も日も長閑で路を歩くのに好い氣持であり、又農事も比較的閑暇な四月頃に、一番多く見受けるといふことだ。此の頃、島に着く船は、日に何百人といふお遍路さんを渡して来る。

一體遍路といふものが、何時の時代から始つたものかは知らないが、大師の教門を弘くする上からいつても、各自の信心を厚くする上からいつても佳いことだと思ふ。そればかりではない。お遍路さんは到る處で愛せられる。又恵まれる。お遍路さん同士も亦お互に遍路であるといふことの爲に信賴する。又扶助する。これが實に佳いことだと思ふ。未知の人達が道連れになつて親しんで行く。路を教へ合ひ、足ら

\* 教門

「未知の人達が道連れになつて親しんで行く」

ぬ物を足し合つて行く。お遍路さんが路傍の家に荷物などを置けば、どの家でも喜んで預つてくれる。決して紛失しないといふことだ。これは遍路としての誰もが、一つの眞實の道に繋がつて居るといふ意識から来るのだ。この道に參ずるには、知識も修養も資格もそんなものは何もいらぬ。婆

「眞實の道に繋がつて居るといふ意識」

さんでも娘でも男でも子供でも、たゞ一つの道を信ずることに依つて、この尊い心持に一致することが出来るのだ。「南無大師遍照金剛」と鑽仰する聲が出て来るのだ。これは實に美しいことだ。争闘と欺瞞とに満ちた社會の中にあつて、信賴と扶助とに心を合はせて行き得ること程美しいことが他にあるであらうか。この島の春を賑はすお遍路さんは、繪としてのみ美しいのではない。彼等が愛し、合ひ、信じ合ふこと

\* 南無大師遍照金剛

\* 鑽仰

\* 争闘  
\* 欺瞞

に生きるが故に美しいのである。  
 「そしてこのことは、獨り彼等お遍路さんの上のことのみではない。私達はみな人生の遍路である。銘々に自ら負はねばならない物を負うて、自分の名前を書いた札を播散らしながら、自分々の路を遍歴して居るのである。しかも私達の周圍には、このお遍路さんに見るやうな信賴と扶助とが行はれて居るだらうか。私は思ふ。私達はこのお遍路さんに學ばねばならない。遍路といふ行事を残した弘法大師の暗示を感じなければならぬ。而して、人間の悉くが、お遍路さんの心を心とするまでに到らなくとも、私達はまづお遍路さんの信と愛とを以て人生を歩きたいものである。」(山水巡禮)

「美しい」

\* 人生の遍路

\* 行事  
\* 暗示

「信と愛とを以て人生を歩きたい」

### 五 新緑

#### 五十嵐 力

五十嵐 力 文學博士。早稻田大學教授。明治七年生。

自然を見る眼が暗いのであらう。私が新緑の美といふものを心から感ずるやうになつたのは、自分で草木を手がけるやうになつてからである。冬の中に寒肥かんごえなどをやつて、花を待ち若芽を待つ、もどかしい一日々々が夢のやうに過ぎて、やがて紅いあか白い色々の花が咲く。そしてそれが散ると、今まで堅く結んでゐた葉が段々にほごれて來て、米粒・大豆粒位の小さなポツチの裡から、三寸・五寸・一尺・二尺といふ水々しい若枝が伸び出す。數枚數十枚の透通るやうな若葉が開けて來る。木によつては尺にも餘る直徑の、化けさうな巨大な葉が、丁度手品師が小さい空箱から大きな雨傘を幾つも出すやうに、幾

「草木を手がける」

\* 寒肥

「もどかしい一日一日」

\* 水々し

「化けさうな巨大な葉」

枚ともなく現れ出でて人を驚かす。凡そ植物の一年間の生活の中で、新緑の時分ほど、驚異を現すことはあるまい。而して其の驚異が、一々我等が平生の手當心遣りに反應して來る所を見ると、一枚の葉の開ける所にも、一寸の枝の伸びる所にも、限りなき喜びが湧いて來る。彼等の瑞々しい生長を見るのは、やがて頑是ない子供の福々しく太るのを見る心である。彼等の新しく生長する姿を見ながら、無駄枝馬鹿枝を剪み切るのは、子供の身體から疣・瘤腫物を除き去つてやる心である。柔かな枝の匂を妨げる古葉枯枝を拂つてやるのは、子供の身體から髪を刈り、爪を切り、垢を洗つてやる心である。而して彼等が舊塵をすつかり洗ひ落とし、自然の風姿をほしきまゝにして、吾等を招くやうに、枝を伸

「瑞々しい生長」  
\*頑是ない

ばし、葉を伸ばすところを眺め、晩春の柔かい日光が透通るやうな薄緑の葉に濾されて、春温の煙るやうな木の下蔭をそゞろあるきする心の喜びは、實に何ともいふことが出來ぬ。

「春温の煙るやうな木の下蔭」

花といへば紅い色を思はせるやうに、緑といへば直ぐに青い色を思はせる。けれども「新緑」といふのは、無論新しい木の葉のあらゆる色を含めていふので、緑や青に限つたのではない。「緑の錦」といふのは、この若葉の無数の色を一番力のある緑に統べさせた名前である。

「緑の錦」

新緑は紅・白・黄・紫など、花の有つて居る無数の色を殆ど悉く備へて居る外に、如何なる花も有つて居らぬ一つの色を有つて居る。「緑」である。「青い色」である。西洋では「青い花」といふ詞が、世の中に無いものといふ意味に使はれて居るが、緑の色

は、實に葉のみの有する特權である。「緑」は、造化が花に禁じて葉にのみ許した貴い色である。花に取つては禁色であり、葉に取つては「ゆるし色」である。あらゆる色を許されて緑のみを許されなかつた花は、いかなる羨みの眼を以て葉を眺めて來たであらう。貧しいながら凡ての色を許された上に禁色の緑を豊かに許された葉は、如何なる誇りを以て花に臨んで來たであらう。櫻が散つてから栗の花の鬱陶しく香ふまでの五十日は、花に色の數々を盡くさした上に、許しの一色を誇るための葉の季節ではなからうか。植物學者は花は葉の變形だと説いて居るが、さすれば葉といふ親が、自分に存在の意味を留めるために、此の一色を美しい子に惜しんだのではなからうか。

「葉のみの有する特權」  
\*造化  
禁色 キンジキ。衣服の染色。深紅・深紫等の如く常人には禁止された色。  
ゆるし色 紅色・紫色等の薄くして、常人にも許された染色。

我等は無盡藏なる水や空氣を貴ばぬやうに、多きに馴れて緑の葉を貴ばぬやうになつて居るが、緑の色ほど人に好い感じを與へるものはない。そして其の緑の色の生粹を現したものが新緑である。新緑は、人間が緑の色に馴れて之を輕んじようとする心を驚かして、其の絶大の價値を覺らしめようとする自然の示威運動である。

家にのみ籠つて居て、殆ど旅行といふものをしたことのない私は、まだ大山・大河・大平野などに於ける大舞臺の新緑の美に打たれたことがない。たゞさういふ景色で平生あこがれて居るのは、嵐山の新緑である。私は數年前、四月はじめの櫻の盛りに嵐山に遊んだことがあるが、あの櫻楓が常磐木の間

「其の絶大の價値」

示威運動  
Demonstration.

「大舞臺の新緑の美」

嵐山 京都市右京區。  
櫻・紅葉の名所。

映し、淺瀬の白波に青い影を碎かせて、渡月橋の上十町を装つた景色が、どんなだらうと思ふと、そゞろに胸の躍るのを覺えて來る。

新緑は私に取つて、實に花にもまさる喜びである。野山の大きな景色は云ふに及ばず、猫の額のやうな小さい庭の新緑でも、なほ自分の小さい心に盛り切れぬ喜びと感謝とを湛へてくれる。

(野草集)

うす緑庭椅子のうへにかゝりたる埃をはらふ朝のしづけさ

(土岐善麿)



新 緑

渡月橋 嵐山の麓、大堰川に架する。長さ約二〇二米。  
\*そゞろ

「喜びと感謝とを湛へてくれる」

土岐善麿 歌人。東京朝日新聞社記者。明治十八年生。

## 六電報

下位 春吉

アドリヤ海は、今しも夕陽を浴びて眞紅の色に染められてゐる。風もそよがず、波も立たぬ。それが何時ともなしに夕闇の色に塗るかへられて間もなく、伊のアンコーナ港の埠頭から二隻の自動艇が離れた。二筋の白い線を引いて北へ北へと走る。その一隻にはリッツォ少佐、他の一隻にはアオンツォ少尉。何れも六人の水兵を乗せてゐる。彼等は敵岸近きプレムーダの群島中に身を潜めて、明朝まで敵状偵察の任に當つた。

二つの靱殻のやうな自動艇は、舳を眞直ぐに小ルッシン島に向けてゐる。着いたのは午前一時頃、その島陰に船を留め

下位春吉 東京高等師範學校出身。ローマ大學教授。

アドリヤ海

Adriatic Sea. イタリヤの東北、大陸との間の海。

アンコーナ港

Ancona. イタリヤ中央部東海岸の港。「二筋の白い線を引いて」

リッツォ少佐

Luigi Rizzo. イタリヤ人、今海軍中佐。

プレムーダ

Premluda. ケッルナローロ灣の群島。

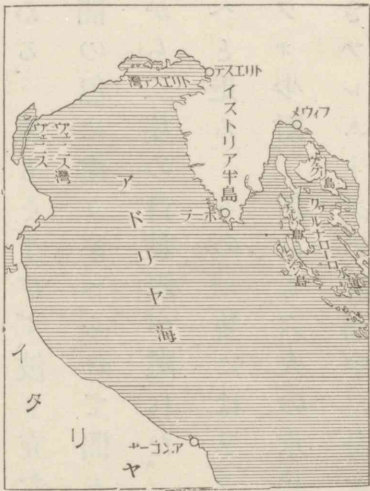
\* 偵察

\* 舳

小ルッシン島

Lussin. カルネロ灣内、カルソ島の南西。

て、よき敵もやと待伏せしながら、四方の偵察に忙しい。しかし何等の異状もない。時は刻々に移つて午前三時になつた。もはや東明に近い。根據地に引上ぐべき時間だ。リッツォ



アドリア海附近の圖

と曙が近づいた。地平線上が明かるくなるにつれて、水面が暗くなる。二筋の白い線が曙の闇の底に長い。

午前三時二十分、艇がフレムーダの近海サンセーゴ島の南

\* 東明

「二筋の白い線が曙の闇の底に長い」  
サンセーゴ島  
Sansego I. アドリア海の東の島。

方にさしかゝつた時、鋭いリッツォ艇長の目には、遙かなる地平線上一點の黒煙を見とめた。すは！と見つめてゐるうちに、見る／＼黒煙は二つとなり、三つ、五つ、八つ、十……幾すぢも幾すぢも林の如く地平線上に現れた。船だ。夥しい船だ。リッツォ艇長は雙眼鏡を取つて、徐ろにその商船なりや軍艦なりや、その大きさ、隊形等を凝視した。

軍艦である。正しく軍艦である。しかも超弩級の巨艦二隻を中に擁して、その周囲を十隻の驅逐艦が取捲いて進んで来る。中の戦艦は、その著しく後方に傾斜したる煙突と、どつしりした砲塔の恰好から推して、疑もなく奥洪帝國の海軍の重鎮たるビリブスウニチス號型だ。二萬噸の巨艦が前と後とに山の動くが如く進んで来る。之を擁護する驅逐艦十隻

「地平線上一點の黒煙を見とめた」

\* 凝視

「正しく軍艦である」  
\* 超弩級

\* 重鎮  
ビリブスウニチス  
Virus Units.  
協力の意。

は、前に一隻、後に一隻、左側に四隻、右側に四隻。その間各約三百メートル。都合十二隻の巨怪が堂々たる隊形を整へて南下して来る。

去んぬる五月十四日、大膽にも伊のペレグリーニ少佐は二名の水兵を率ゐて、敵の根據地ポーラ港に突入し、ビリブスウニチス號型のドレッドノート、二萬噸の巨艦に肉薄した。一同は敵圍を突破して歸ることが出來ずに、遂に皆捕虜となつた。

敵の海軍はこれに懲りて、ポーラ港の不安を憂へて南方セベニコ又はカッタロの地に安全の根據地を求めんがために、夜に乗じて密かに南下するのであらうか。それとも更に南下して、土耳其の海軍と合して共同の作業につくためであらうか。

但しは又、イタリヤの沿岸を攻撃するためであらうか。何れにしても油斷のならぬ大敵だ。

しかし、とても數に於て敵ではない。こちらは一隻にやうやう七人を乗せ得る小さな自動艇が二隻。總勢十四人で、何千倍の噸數、人數を有する大艦隊に對抗して戦ふ事は、到底不可能の事だ。一打にして打ちつぶされるのは火を睹るより明かだ。そんな危険を冒さずとも、敵艦を見て之を直ちにアンコーナに報告しても務はすむ。敵に見つからぬやうに密かに根據地に歸るのが當然であらう。

しかし、それはリッツォ艇長のなし得ざる處だ。彼の平常の箴言は、

「進撃せよ。常に進撃せよ。危険を意とせずして、最も強く

\* 巨怪

ポーラ港 Pola.  
イストリア半島の港。

ドレッドノート  
Dread naught.  
弩級戦艦。  
\* 肉薄

セベニコ  
Sebenico.  
(Sebenik). アドリア海に注ぐケルカ河の河口に當り、古寺院多し。  
カッタロ Cattaro.  
アドリア海に面し、カノタロ灣の南東端にある海港。

「油斷のならぬ大敵」

「火を睹るより明かだ」

「報告しても務はすむ」

\* 箴言

「常に進撃せよ」



最も大なるものを進撃せよ。」といふのである。彼は電の如く決心した、わづか十四人を乗せた二つの靱殻をもつて、堂々たる敵の大艦隊に向つて突撃しようとして……。

\*二つの靱殻

リッツォ少佐は雙眼鏡をおろして、後方につゞくアオンツォ少尉の小艇に信號した。

「見たか。」

「見たか」

すると、アオンツォ少尉が信號を返した。

「分つた。」

「分つた」

それだけである。何と痛快ではないか。こんな痛快極まる信號が又とあらうか。兩艇は更に一語をも交さず、互に大事を黙解して、眞一文字に敵の大艦隊に向つて突進した。

勇士の決意は鐵のやうである。

「勇士の決意は鐵のやうである」

リッツォ少佐の指揮する自動艇は、右側第二と第三の驅逐艦の間を突破して第一の巨艦を、アオンツォ少尉は同じく第三と第四の驅逐艦の間を突破して、第二の巨艦を襲撃することに決した。

「アドリヤ海がほのぼのと明けかゝる」

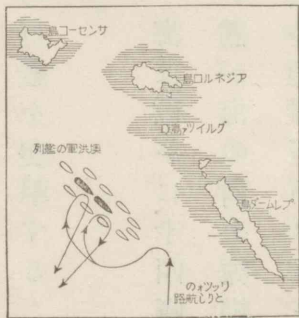
アドリヤ海がほのぼのと明けかゝる。海は穩かに、十四條の黒い煙が林のやうに立つてゐる。淡い靄が海の面を練絹のやうに包んでゐる。各驅逐艦の間は、其の距離三百メートルに過ぎぬ。見つかつたらそれつきりだ。極度に速力を緩めた二つの木の葉舟は、音をも立てて、夢の奥にひらめく鳥影のやうにするくくと敵艦の間をすり抜けて、大艦隊の眞中にもぐり込んだ。十二隻の敵艦につけられたる數十の哨兵が、

\*二つの木の葉舟

\*哨兵

誰一人この黒い「死の鳥」の影が彼等の懐にもぐり込んだのに  
氣づかなかつた。

自動艇からの魚雷發射は極めて困難である。艇は非常に  
小さい。僅か五六人の人を乗せるのもやう／＼な位。無論  
水雷發射管はない。二個の魚雷を舷側  
に鎖で括りつけて、鈎でぶら下げて持つ  
てゐる。それを發射するには、その鈎を  
外して海中に落すと、魚雷は一杯に詰め  
られた壓搾空氣の力で走り出す。だか  
ら發射する時に、自由にその狙を定める事は出来ぬ。艇その  
ものを目標の方に向けて、魚雷の方向が丁度目標物に向つた  
刹那に鈎を外さねばならぬ。だから、非常に冷靜沈着な人に



「黒い死の鳥」

\* 壓搾空氣

「冷靜沈着な人にして始めてその効果を收め得る」

して始めてその効果を收め得るのである。

リッツォ艇長は舵手長ゴーリに命じて艇をずん／＼と巨  
艦の右舷間近に進めさせた。その距離今や僅かに百五十メ  
ートル。二萬噸のドレッドノートは山の如く鼻先に聳えて  
ゐる。「よし、今！」

「よし、今！」

\* 武者頼心

先づ右舷の魚雷を飛ばした。その瞬間、軽い自動艇が武者  
頼心するやうに一揺れ揺れる。リッツォはさらに左舷に飛  
んで行つて、左方の魚雷を水中に放つた。「よし、やった！ 全  
速力！ 後退！」

「よし、やった！」

\* 賭す

艇は忽ち眞白に波を切つて去る。彼は今一度死を賭して  
敵の艦列を突破せねばならぬ。  
彼の自動艇が第一のドレッドノートの右舷から離れると

すぐに轟然たる二つの爆音が、静かなるアドリヤ海の曙の靄を劈いた。第一の魚雷は第一第二の煙突の中間の下方に、第二の魚雷は艦尾の砲塔の下方に命中したのだ。物凄い爆発と共に、忽ち眞黒い煙が空に聳え立つて、その中から赤い焰の舌がめら／＼と躍り上る。阿鼻叫喚、一時に艦内から數千の叫び聲があがる。死の苦惱の如くに汽笛が長く／＼悲鳴する。この刹那、忽ち又第二の巨艦の中腹に第三の爆音があがつた。アオンツォ少尉もまんまと艦列を突破して、第二の巨艦の右舷に迫り、一個の魚雷を放つたのが命中したのだ。

この瞬時の敵の混亂を想像せよ。

そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。十隻の驅逐艦に犄々と護られてゐる巨艦が、二隻ともかくの如く襲撃をうけようとは！

「轟然たる二つの爆音が、静かなるアドリヤ海の曙の靄を劈いた」

\* 阿鼻叫喚

「そもや何處から來た。どうして來た。全體何が來た。」

敵は大擾亂。各艦からひゞく非常の汽笛。乗組員の騷擾。二艦の急を救ふもの。大膽不敵な伊の小艇をおつとり圍んで砲火を浴びせるもの……。

リツツォの艇は忽ち敵の三驅逐艦に見つけられた。彼等は狂ひ立つてリツツォの艇を追ふ。速力に於て、自動艇はとても驅逐艦に及ばない。その大きさに於ては霄壤の差がある。彼はあらゆる武器を備へてゐるのに、此方はステッキ位の速射砲一つを載せてゐるだけで、乗組は總員僅かに七人だ。距離は見る間にずん／＼と近くなる。一番近い敵の驅逐艦が眞白に波を蹴立てて突進して來る勢の物凄さよ。どんどんと浴びせかけられる砲彈が、艇の四方に數丈の水柱を立て

「狂ひ立つてリツツォの艇を追ふ」  
\* 霄壤の差

る。  
 萬事休す。逃れるにはその速力がない。戦ふにはその武器がない。進んで衝突しても、靱殻同様の自動艇は忽ち微塵に挫かれるばかりだ。何としよう。リッツォの果斷はこゝにある。リッツォの沈着はこゝにある。リッツォの豪勇はこゝにある。

「萬事休す」

「果斷」

「豪勇」

「速力を緩めよ」

「速力を緩めよ。」  
 命令を聞いて、ゴリー舵手長が驚いた。

「大丈夫ですか。」

彼は自分の耳の聞違ひか、少佐の口の言誤りだと思つたのだ。

「上官の命令だ！」

「上官の命令だ」

艇長は獅子の如く吼えた。一同は少佐が發狂したものと思つたさうだ。無理もない事だ。敵艦三隻は「得たりや」とばかり狂ひに狂つて邁進して來る。その間僅かに百メートル！ リッツォは莞爾として薄紅の曙の中に微笑んだ。

\*邁進

「薄紅の曙の中に微笑んだ」

自動艇は潜水艇と戦ふために二三個の爆彈を積んで居る。これは潜水艇の前路に廻つて水中に投下するものだ。リッツォは逸早く爆彈の一つを擁して、冷やかに敵の近寄るのを待つてゐた。そして敵艦が手も届く許り近づいた時、彼は爆彈を船尾の白波の中に放つた。敵艦はそれとも知らず眞一文字に突進して來た。忽ち起る爆發の轟き！ 驅逐艦の船首は大破損を起して、見る／＼うちに傾いてしまふ。追撃して來た他の二隻も友の危急に心を奪はれて、周章狼狽、今や沈

「忽ち起る爆發の轟き」

\*周章狼狽

没せんとする僚艦の兩側に走つた、リッツォの艇を見棄てて。

「萬歳！ もう大丈夫！ 全速力！」

リッツォの小艇は波を切つて、曙のアンコーナの港へ。そ

れにしても心がかりはアオンツォ少尉の艇だ。無事に敵圍

を逃れたかどうか。一同が心を碎いて彼方の海を見つめて

ゐると、遙かに白波を擧げて突進して來る一葉舟、正しくアオ

ンツォの艇！ 彼方から、此方から、狂喜してイタリヤ萬歳を

叫んだ。喜極まつて十有四人は皆泣いた。地平線上に黒煙

を見てから、二艇再び此處に相會するまで丁度二十分間。

霧紫に夜は明けて、三色旗が朝風に翻る。海はまだ眠るか、

小波もない。

リッツォが二つの魚雷を<sup>はなむけ</sup>驢して、瞬時にして沈めてしまつ

「萬歳！ もう大丈夫！ 全速力！」

「曙のアンコーナの港へ」

\* 一葉舟

「黒煙を見てから……二十分間」

「霧紫に夜は明けて」

\* 驢

\* 覇者

ステファノ

Stephen. キリストの死後最初の殉教者、聖徒。聖徒。聖徒。

\* 曳船

たのは、塙洪海軍の覇者ビリブスウニチス號型の聖ステファノ號であつた。聖ステファノ號は無数の犠牲と共に即時に沈んでしまつた。他のドレッドノートゲトフ號も大損傷をうけたまゝ、曳船せられて、出發地點のポーラ軍港に入つた。爆彈を喰つた敵の驅逐艦は、大破損のまゝ、二驅逐艦の間に狭まれつゝ、曳船せられて去つた。

六月十日の早朝、アンコーナの港内に二自動艇は揚々として引きあげて來た。總員十四人、たゞの一人として微傷を負うたものすらない。一同の意氣は天を衝くの概がある。一行は忽ち、知人や市民に十重二十重と取圍まれた。その時のリッツォ艇長の話が、ゆかしい。

「夢のやうです。」

「夢のやうです。」

\* 天を衝く

それだけ。そしてすぐ郵便局に行つて、まづ第一に故郷の老母に電報を打つた。

其の日正午少し前、ミラツツォにある母の許に一通の至急電報が着いた。胸を轟かして開いた母は、その電文の内容によつて、更に更に驚かされた。中にはたつた一語、「嬉しくてたまらぬ。」



長艇オツツリ

市民の祝賀會をうけ、上下兩院各大臣、その他各地の無数の公私團體から祝電や祝文をうけても、謙讓寡言な少佐は、「祖國のために盡くすべき、私の神聖なる義務の萬分の一を盡くしたに過ぎません。」と、くり返すばかりであつた。

(大戦中のイタリヤ)

「まづ第一に故郷の老母に電報を打つた」

ミラツツォ  
Milazzo. シツリ  
ヤ島の港。

「たつた一語嬉しくてたまらぬ」

\*謙讓寡言  
「神聖なる義務」

### 七 巨象のやうに

白鳥省吾

夕、松林の中のそゞろあるき  
その丘の上には大きい石があるといふ  
友のあとに叢を踏んで行くと

巨象のやうな石はまだ日光の温かみを保つてゐた。

私はそれを撫でその上に乗つて曠野を眺望した。  
來る人も稀な丘の上  
草はさゝやかな花をつけ  
蜘蛛は獲物を樂しむやうに網をつくつてゐた。  
遠く蝸もないてゐた。

白鳥省吾 詩人。明  
治二十三年生。

「そゞろあるき」

「巨象のやうな石は  
まだ日光の温かみ  
を保つてゐた」

「それを撫でその上  
に乗つて」

此處は筑波の山裾  
稲の花さく頃の夕暮を  
労働から歸る村人の姿もなつかしい。

遠い原始から此處に置かれてある大きい石  
村人の喜びも悩みも知る大きい石  
パリを俯瞰するノオトルダムNoter Dameの怪像よりも  
どつしりとして重みのある大きい石  
村人はそれを村人らしく箱石と名づけ傳へてゐる。

(詩と隨筆集)

筑波の山 茨城縣筑波・眞壁・新治三郡に跨がる名山。山容秀麗。八七六米。  
「村人の姿もなつかしい」

「原始から此處に置かれてある」  
ノオトルダム Noter Dame、ノオトルダム寺院は舊敦の大本山。ライン河を隔て、市廳と相對す。西紀一六三三年に起工し、三百年の後竣工せしもの。  
「どつしりとして重みのある大きい石」

### ハ 修善寺行

吉田 絃 二郎

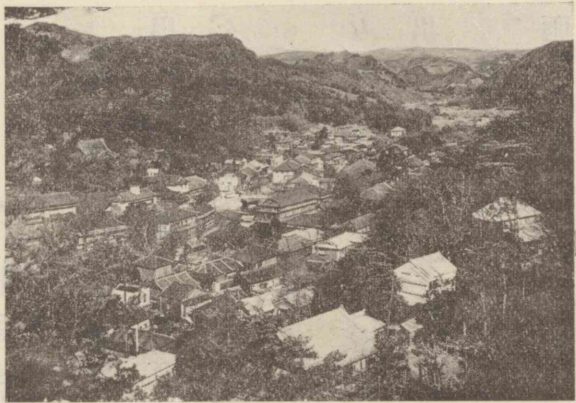
まだ薄暗い中に眼が覺めた。湯の中からは田舎客らしい男の痛高い聲が絶えず聞えて來た。雨が降つてゐるのか、笥を傳うて流るゝ水が、遠い鈴のやうな音を立ててゐる。  
旅だ！ と思つただけでも、神經の端々までも寛いだやうな氣がする。久しい間見失はれてゐた本當の自分の姿が見出されたやうな、快さや懐かしさが喚びさまされて來る。  
池の鯉が跳り上る音や、階下の湯の中からの笑聲が、靜かな雨の朝の空氣を搔亂して傳はつて來る。  
宿の男が氣を配りながら、そうつと戸を開けて行つた。どんよりとした雨の空の鈍色が障子に反射して見える。久し

吉田絃二郎 名は源次郎。文學者。明治十九年生。

修善寺 靜岡縣田方郡の町。狩野川の左岸、達磨山の東麓に當る。大仁驛の南。温泉と史蹟とで名高い。  
「遠い鈴のやうな音」

\* 本當の自分

い間聞いた事のなかつた四十雀や、繡眼兒や、鶉や、駒鳥や、鶯の  
聲が直ぐ枕に近い木立の中から流れて来る。



修善寺の全景

ると、彼等は本當の自分に立歸つてゐる。

長い廊下を湯の方へ歩いて行くと、そこでは見知らぬ旅人達が、私を見ては「お早う」と言ふ。私も亦「お早う」と言ふ。何の不自然な感じも抱かないで。

旅では大抵の人が善人の心に歸つてゐる。都會では、人は無理にも自分を殺して冷酷な人間となつてゐる。それが一度旅に出

四十雀 燕雀類中マカカラ科に屬する禁止鳥。  
繡眼兒 燕雀類、雀に似て眶に白い輪がある。  
鶉 燕雀類中ツグミ科に屬する鳥。  
駒鳥 燕雀類中スマメ科に屬する鳥。  
「流れて来る」

「善人」

「欄干に凭つて」

桂川 狩野川の支流。一名修善寺川。

修禪寺 延暦十七年(四四〇)僧空海の草創。眞言宗であつたが、後臨濟宗に改め、肖廬山修禪寺と改稱。

岩燕 燕の一種。

\* 恰好

「水の上を掠めて飛んでゐる」

鶉 燕雀類中鶉科に屬する鳥。形燕に似て尾長く、青灰色で腹は白い。いたゞき。

「寂しい細い雨の絲」

「本を読む氣にはなれない」

湯から上つて欄干に凭つて立つと、霧に包まれた春の山が、桂川を隔てて湯の町の屋根に迫つてゐるのが見える。修禪寺の本堂を周つて、雨に濡れた櫻が白く煙つて見える。岩燕であらうか、翅の眞黒な、さうして普通の燕よりは稍肥つた恰好の小鳥が、桂川の瀬をなした水の上を掠めて飛んでゐる。その聲が千鳥に似て優しく傷々しい。黒い大きな岩の上にも屋根の上にも、鶉が雨にうたれながらとまつてゐる。鶉の歌も、寂しい細い雨の絲にふさはしい聲である。東京を發つ時、二冊の本を持つて來たのであつたが、私はどうしても本を読む氣にはなれない。本を読む機會は何處でも見出されるけれども、このやうな落着いた心で自然その



ものの中に浸されてゐる機會は、滅多に見出されるものではない。本を讀む爲に少しでも自然から眼を離すのは、惜しいやうに思はれてならぬ。

昨日この町に来る途中でもさうであつた。私はバスケットの中から本を出しは出して見たが、一行も讀むことは出来なかつた。一年中地下室の生活みたやうな生活をしてゐる私には、太陽の光の直下に照らされてゐる自然を見ることは心の躍るほどの驚異であつた。

新しく掘返された土の上にも、松林の間にもちらほら見えてゐる桃の畑にも、水車小屋の草に包まれた草葺屋根の上にも、白い蕪の花にも、黄色な辛子菜の花の上にも、砂丘の上にも、生まれたまゝの自然の輝きが湛へられてゐた。「本を捨てよ」と

バスケット  
Basket.

「心の躍るほどの驚異」

「生まれたまゝの自然」

言つたマアカスアウレリアスやモンテーンの言葉を、私はそのまゝ受容れることが出来た。

午後になつて雨がやんだ。小高い雑木林の小徑を歩いてゐると、木の隙間からは、天城や十國峠や乙女峠が、なだらかな傾斜をなして連なつてゐるのが見える。修禪寺の鐘の音が静かな山の隅々迄も餘韻を傳へて顫へてゐる。麥畑を圍んだ疎林からは、小鳥の聲が止まぬ。櫟林を通りぬけて、水車小屋の三つばかり竝んだ小川の傍に来ると、チューリップの咲いた花畑がある。そこから範頼の墓は直ぐであるが、日が暮れかゝつて來たので、桂川に沿うて町の方へ歸つて行く。去年の冬來た時見知つた犬がやはり同じ家の前にゐて、尾を振つて來たが、何もやるものを持たなかつたので、頭を撫でてや

マアカスアウレリアス Marcus Aurelius (121-180).  
ローマ皇帝。

モンテーン Montaigne (1533-1592). フランシスの哲學者。

天城 伊豆半島中部の東半に連なる火山帯。最高峰を萬三郎岳といふ。一四〇五米。

十國峠 箱根山系の一峯、日金山の頂上をいふ。

乙女峠 相模と駿河との境にある峠。

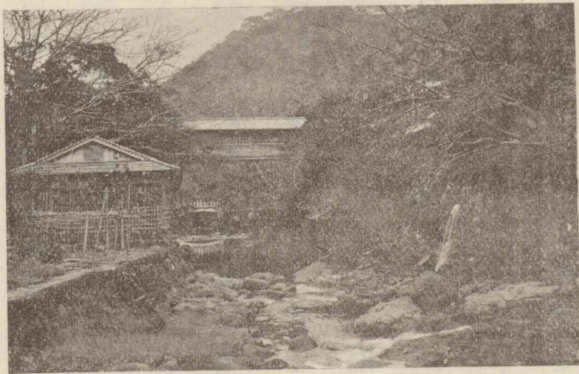
「修禪寺の鐘の音が顫へてゐる」

チューリップ Tulip. 鬱金香。

範頼 幼名蒲冠者。兄頼朝に忌まれて修禪寺に幽せられ建久四年(八五三)配處に自刃した。

つたら、桂川の處まで跟いて来て、橋の上から菜畑の方へ駆け  
て行つた。

夜が明けきらぬ中から小鳥の聲  
が聞える。修禪寺の鐘が谷の底か  
らでも湧いて来るやうな響き方を  
して傳はつて来る。大仁行の馬車  
の鈴の音が必ず朝毎に聞える。「さ  
よなら。」「御機嫌よう。」といふやう  
な挨拶が取交されて、馬車の人々は  
危げな橋を渡つて、桂川に沿うた野の道を下つて行く。馬車  
はやがて青い丘の蔭にかくれてしまふ。浴衣を引掛けた、病



桂川の清流

大仁 静岡縣田方郡  
田中村。駿豆鐵道  
の一驛。

「修禪寺の鐘が谷の  
底からでも湧いて  
来るやうな響き方」

人らしくもない田舎の人たちが、退屈まぎらしのつもりか、橋  
の上に立つては往々来るさの旅の人々を見てゐる。

嵐山と城山との間の峠を越して、下田街道に沿うて旭の瀑  
を見に行つた。桑畑の傍に立つてゐると、後から來た老人が、  
問ひもしないのに先方から聲をかけて、「瀧の道ならこつちだ。」  
と教へてくれる。老人について麥畑の中を七八丁も歩いて

ゐると、下田街道から右手に、遠くの空に懸つた高い瀧が見え  
る。南畫にでもありさうな古雅な眺である。

椿の花が眞紅に咲いた寺の廣場で老人と別れた。今日は  
お説教があるので、庫裡には老人達が茶など煎じてゐるのが  
見えた。

「三十六丈の瀧で、朝五時頃朝陽が映る頃は何とも言へない

\* 往々来るさ

城山 狩野川の對岸。  
下田 静岡縣賀茂郡。  
旭の瀑 一名白絲瀑。  
高さ約六十米。

「問ひもしないのに  
……教へてくれる」

南畫 南宋畫の略。  
支那唐代、南方よ  
り起つた雅致風韻  
を旨とした畫風。  
「椿の花が眞紅に咲  
いた寺の廣場で老  
人と別れた」  
\* 庫裡

眺だ……。」といふやうな茶店の女の説明を聞いてゐたが、私には、瀧といふものに對して興味は起らなかつた。下田街道に出ると、そこからは、廣い磧かほをなした狩野川が、春の水を泛かべてうねりくねりして流れてゐるのが見える。李や梨の白い花の下を、五、六人づつかたまつては、老媪たちが寺の方へ歩いて行くのを、幾度も見かけた。

狩野川に架けた釣橋を渡つて妙國寺に行くことにした。妙國寺はがらんとした古い寺で、本堂から庫裡へ通ふ廻廊の屋根には青い草が一面に生えてゐた。蝕むしばんだ階段を登つて行くと、暗い須彌壇の前には、顔の蒼ざめた女がしきりと何か念じながら、手一杯に抱へた椿の葉を疊の上に落しては、裏を見せた葉と表を見せた葉の數を算へてゐた。私はこの古風

「興味は起らなかつた」

狩野川 天城山に發し、静岡縣沼津市に至つて海に注ぐ。

妙國寺 日蓮宗の名刹。永和三年(三三〇)日蓮の創設。

「がらんとした古い寺」  
須彌壇 寺院の中央に備へ、佛像又は厨子を安置する壇。

な迷信に生きた女を、何時までも興味をもつて靜かに見つめてゐた。椿の葉に佛の御告が現れて來るといふ、如何にも山國らしい傳説である。

庫裡の方へ廻つて、お萬の方について細かい傳説をも聞きたいと思つたが、そこには薄暗い、がらんとした大きな室の片隅に、たゞ二人の雛僧が明かるい窓口に對して坐つてゐるばかりであつた。

「お萬さまは久しい間この寺に居られたと云ふだけで、私達は何も知りません。」といふ雛僧の聲を後にして、私は椿の花のこぼれた門の方へ歩いて行つた。

廣い麥畑の隅に、一人の老人が草搔で雜草をむしつてゐるのを見出したので、私はその老人に「お萬の方」のことを尋ねて

「山國らしい傳説」

お萬の方 徳川家康の側室。  
「そこには薄暗い……坐つてゐるばかりであつた」  
\*雛僧

「一人の老人」

見た。

「お萬さまの化粧の井戸といふのが、つい近年までありましたが、今では一寸見當もつきません。あの畑のあたりでした。」と言つて指した藪の傍の畑には、白い蕪の花が麥の間からほのかに見えてゐた。

「お萬柿と言つて、お萬さまが植ゑなされた柿の木があつて、一年に三度、柿の實が生るといふ昔からの言傳へでしたが、俺共も二度生つたのは覚えてをります。三度目は花ばかりでしたが……。」老人は草搔を動かしながら、そのやうなことも語つた。

振りかへつて見た時は、老人は麥の中に隠れてゐた。富士の白い嶺が、妙國寺の木立の上の青空に、くつきりと曲線を描

「白い蕪の花が麥の間からほのかに見えてゐた」

「振りかへつて見た」

いてゐるのが見えた。

頼家の墓に詣つたのは夕方であつた。政子の寄進に成つたと傳へられてゐる經堂の前には、長唄の師匠の家が出来、中からは絃につれて唄の聲などが洩れてゐた。夕暮の道を埋めるばかりに花が白く散つてゐた。

修禪寺の庫裡の横に出た。旅から歸つて來たのか、または旅の僧であるのか、若い僧が二人縁に腰をかけたまゝ、草鞋を解いてゐた。傍には深い笠が二つ脱ぎ捨ててあるのも、山寺の夕暮らしい感じを抱かせた。

鶯の聲が霧深い雑木林からひつきりなしに聞える。昨夜はこの町に活動寫眞があつたので、宿の田舎客たちは夜遅く

頼家 頼朝の長子。

鎌倉第二代の將軍。建仁三年(一一六三)事によつて北條時政のために修禪寺に幽せられ、翌元久元年七月、刺客のために浴室で殺された。時に年二十二。

政子 北條時政の女。

頼家の母。世に尼將軍と稱する。その子頼家の冥福を祈らんがために經堂を創建した。嘉祿元年(一一八五)歿、年六十九。

\* 經堂

「夕暮の道を埋めるばかりに花が白く散つてゐた」

「笠が二つ」  
「鶯の聲が霧深い雑木林からひつきりなしに聞える」

歸つて来て、湯の中で騒いでゐた。私は夜半に幾度も眼を覺  
まさせられたせゐるか、今朝は少し頭が重い。

伊東からわざわざ會ひに来てくれたK君とS君を送つて  
大仁まで歩いて行つて、歩いて歸つて来た。人に逢ふ事を避  
けて旅に出てゐながらも、人に別れては寂しさが犇々と迫つ  
て来る。K君やS君の馬車が越えて行つた天城の連山が、春  
らしく霞んでゐる。山には野火の煙が柔かい春の光に溶け  
こむやうに上つてゐる。

紫雲英の一面に咲いた田の畦に、兩脚を投出して、下田街道  
に行く馬車を見てゐると、馬車の中から聲をかけたものがあ  
つた。それは、修善寺に來る途中で知つた母子づれの旅人で  
あつた。

伊東 田方郡伊東町  
相模灣に臨む。源  
平時代より伊東氏  
の城邑として廣く  
知られた。今温泉  
場・海水浴場とし  
て名高い。  
「人に逢ふ事を避け  
て……、人に別れ  
ては寂しさが犇々  
と迫つて来る」

「母子づれの旅人」

「今度は少し海岸の温泉に行つて見ようと思ひまして……。」

と云ふ母の聲を残して、馬車は桃の花の咲いた村の方へ、狩野  
川沿ひの道を駛つて行つた。不治の病を持った娘をつれて、  
温泉町から温泉町へと旅を續けてゐる二人の氣の毒な運命  
を考へながら、私は馬車の後を暫く見送つてゐた。輝かしい  
曠野は青い色に燃えてゐた。

\* 不治の病

明日は東京に歸らなければならぬと思ふと、さすがに淡  
い旅の哀愁も湧く。大雪の中を七八里も歩いたので、腰も立  
たぬ程患つたといふ隣室の男と語つてゐても、何だか旅の離  
愁といふやうな感じがする。

「旅の哀愁」

\* 離愁

晩方、氣晴しに出かけて、大澤だの堀切だのといふ山里に通

大澤・堀切 修善寺  
の大字。

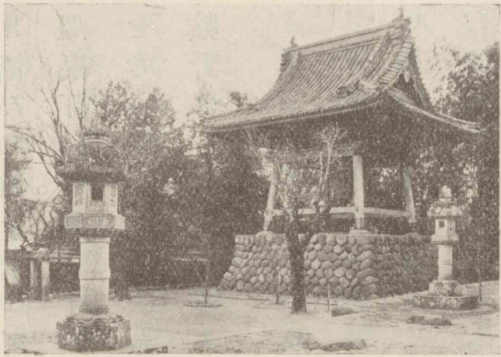
ふ芝草山の峠に上る。天城から乙女峠の連互や、狩野川の流も見える。富士の裾が海に入つて煙つてゐる。

麓から三人の女が空籠を背負つて登つて来る。

裏山から修禪寺の庭に出た。広い本堂の中を、黒い法衣ころもの僧たちが法燈をかゝげて黙したまゝ、動いてゐた。廻廊を歩む若い尼僧の顔が白く夕月に照らされてゐた。

石磴いしだんを下つて来ると、右手に鐘樓

がある。鐘樓には三人の雛僧が立つて入相の鐘を撞いてゐた。一つの鐘と次の鐘との間には、かなり長い間がある。鐘



修禪寺鐘樓

\*連互

「三人の女が空籠を背負つて登つて来る」

「若い尼僧の顔が白く夕月に照らされてゐた」

\*鐘樓

\*入相

の餘韻が、いつまでもいつまでも蜜蜂がうなるやうに響いてゐる。その間雛僧たちは何か語つては笑つてゐる。三つばかり鐘が撞かれてからであつた、二人の雛僧は、登いしたたみの上を庫裡の方へ消えて行つた。後には只一人の雛僧が重たげに撞木を動かしては、彫物か何ぞのやうに、だんまりこんで鐘の下に立つてゐた。

\*撞木

鐘の音は山から山を越えて、やがて闇の中に吸込まれてしまつた。

「闇の中に吸込まれてしまつた」

淡い月影の下に、今夜も遠い山の野火が帯のやうになつて燃えてゐる。

(小鳥の来る日)

「野火が帯のやうになつて燃えてゐる」

### 九 菅公夫人

山田新一郎

菅公夫人は北野天満宮の西の座に祀られてある。夫人は菅公に別れて数年の後には、棲むべき家もなくなり、吉祥院といふ菅家の菩提寺の一室に寄寓して居られたので、普通吉祥女と稱へられてゐる。昌泰二年、夫人が五十歳に達した時、醍醐天皇がわざわざ祝賀の勅使をお遣はしになつて、従五位下をお授けになつたといふ外には、夫人の傳記は多く傳はらな

いが、當時有数の賢夫人であつた事は想像される。菅公の御子方はなか／＼大勢あつたが、上の方の御子方四人は、菅公と同時に諸國に流されたほど、揃うて相當の地位に立つて居られた。これには夫人の内助も與つて力のあつたものと考へ

山田新一郎 元北野神社宮司。元治元年生。

菅公 菅原道真。北野天満宮。官幣中市上京區。

吉祥院 京都府紀伊郡にあり。菅原氏の氏寺。淨土宗。

昌泰 醍醐天皇の御代の年號。その四年に「延喜」と改元された。

醍醐天皇 第六代天皇。御在位寛平九年（五七〇）—延長八年（五九〇）。同年崩御、御壽四十六。

「揃うて相當の地位」

られる。

延喜元年一月二十五日、菅公が俄に太宰權帥に左遷されて、二月一日都を立つて行かれる時、

東風ふかばにほひおこせよ梅の花あるじなしと  
て春なわすれそ

と詠まれたのは、草木に寄せて最愛の夫人に別れを惜しまれたものともいはれよう。西遷の道すがら、都への便りにこ

とづけて、  
君が住む宿の木ずゑをゆく／＼もかくるゝまで  
にかへり見しはや

と盡きぬ名残を惜しまれたのも、即ちこの夫人に對してであつた。以て其の琴瑟の情もしのばれるのである。

延喜 醍醐天皇の御代の年號（五二〇—五三二）。

太宰權帥 中納言を以てこれに任ず。

大臣左遷の時、權帥に任ずるを例とす。

\* な……ぞ

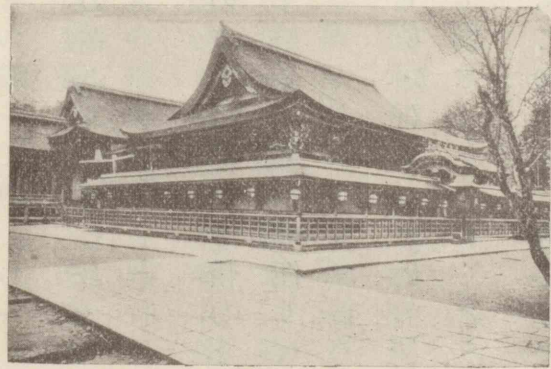
君が住む 此の歌は拾遺和歌集別の部にある。

\* はや

「かくるゝまでにかへり見しはや」

\* 琴瑟の情

夫人の京都に於ける佗住居のさまは、菅公が太宰府謫居中の詩によつて多少窺はれる。公が太宰府で衣食住共に缺乏し、悲惨極まる二箇年の月日を送られたに比べて、京都の方も亦劣らぬ境遇であつた事が想像される。菅公の太宰府で詠まれた詩の中に、「雪夜思家竹」と題して、「家僕早逃散。凌寒誰掃撤」といふ句があつて、留守宅では下男も逃げた様子だが、雪折竹の雪を拂ひ除ける者もあるまいと、故郷のことを氣遣つて居られる。此の詩は延喜元年、即ち去年今夜の詩を詠まれた年の冬の作

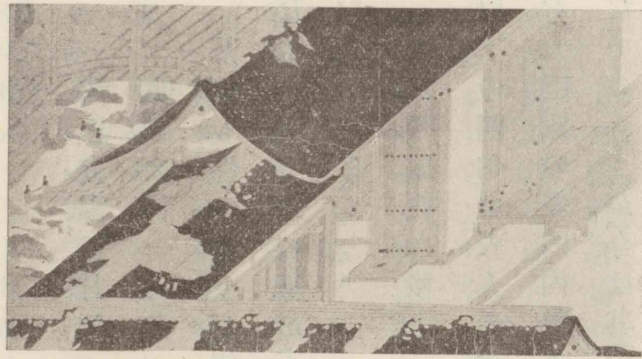


北野天満宮

太宰府 福岡縣筑紫郡水城村に舊跡あり。現在の太宰府は町にして菅公を祀る官幣中社太宰府神社あり。

\* 逃散  
\* 掃撤

去年今夜の詩 九月十日と題する。  
「去年今夜清涼ニ侍ス。秋思ノ詩篇獨リ斷腸。恩賜ノ御衣今此ニ在リ。奉持シテ毎日餘香ヲ拜ス。」(菅家後草)



菅家玄關の圖(松崎天神緣起より)

である。一朝にして右大臣を罷められ、食祿に離れ、しかも大臣暮しで育つた御子達は、大勢ある留守居の夫人の苦勞が一通りや二通りでなかつたことは申すまでもあるまい。こんな困難な家、しかもお咎を蒙つた菅家のことであれば、はしたない下男どもは早々逃出して、權門に走つたものと思はれる。夫人はかゝる困難を凌いで、御子方相手に留守を守つて、氣丈に家政を齊へ、夫を大事に思つて居られたことは、更に次に引く菅公の太宰府に於ける詩に躍如として現

\* 右大臣

\* 氣丈

\* 躍如



れて居る。これも延喜元年冬の作と思はれるが、「讀家書」と題して曰く、

消息寂寥三月餘

便風吹着一封書

三月餘も都の便りが絶えて、甚だ寂しく感じたが、今日は如何なる吉日ぞ、東の風が吾が家の手紙を吹きつけて來た、嬉しいことである。

西門樹被人移去

以下の四句は、夫人の送られた手紙の内容を詠まれたもので、右大臣家の表門内であれば、松か梅か立派な樹が植ゑてあつたであらうが、今は其の樹を人が持つて行つたことを敘してある。多分米鹽の代に樹を賣つたか、取られたかしたのであ

〔被人移去〕

らう。

北地園教客寄居

天神御所の北地といへば紅梅殿であらう。客を寄居せしむとあるから、こちらの方は他人に貸されたものと見える。これが昨日まで右大臣として帝の寵遇斜ならざりし菅公の夫人の生計の有様である。太宰府の菅公はどんな心持で此の手紙を讀まれたであらうか。

紙裏生薑稱藥種

昔の草根木皮の薬には、生薑の配煎が必要とせられたのであるから、いはば生薑は家庭衛生の必需品である。「たまに生薑が手に入りましたから、不時の用にと紙に包んで貯藏して置きました。」の句は、一物もいやしくもせられぬ夫人の用意の

〔教客寄居〕

\*天神御所  
紅梅殿 菅公の邸の  
名。

\*寵遇  
\*菅公の夫人

〔藥種〕

程が知られる。

竹籠昆布記齋儲

内の御祭の御供物も十分には辨じかねる境遇である。珍しく昆布をもらつたからとて、御子方の總菜にもされずに、直ちに竹筒に入れて、御祭の時の神饌の用にしまはれたといふのである。

以上の四句は千言萬句よりも明かに、京地に残された菅公一家の生活状態を菅公の筆で現して居る。何たる悲惨の境遇であらうか。其の反面には、夫人が凜乎たる決心を以て、百難を排して生計の方法を講じ、缺乏の中に祭事を大事にし、薬餌の果てまでも注意して居られる誠に行届いた齊家の有様が、ありくと見えるではないか。

「齋儲」

\* 辨じる

\* 凜乎

「百難を排す」

「齊家」

不言妻子飢寒苦

爲是還愁悞惱余

留守宅の現状は前の如くであるが、それをたゞ其の通りの事實として報じただけで、其の餘は徒らに夫を心配させまいとてか、自分や子供の飢寒にせめられて困つてゐる愚痴は、一言もいうて來ぬ。言はないどころか、御留守はとにかくどうにか遣つて居ます。」と、却つて安心を求めて來る雄々しさは、なかなか竝々の婦人に出来ることではない。榮華をこれ事とした當時の婦人社會では、指を屈すべき第一人であつたであらう。實に菅公の夫人たるに恥ぢない人といへようと思ふ。

「不言妻子飢寒苦」

\* 悞惱

\* 愚痴

\* 榮華をこれ事とし

「第一人」

(梅花遺芳)

### 一〇 小品二題

薄田 泣菫

薄田泣菫 名は淳介。詩人。大阪毎日新聞社客員。明治十年生。

栗

今日但馬にゐる人のところから、小包を送つて來た。手に取ると、包の尻が破けてゐて、焦茶色の大粒の栗の實が四つ五つ、ころ／＼と轉がり出した。

「いよう。栗だな。丹羽栗だ……。」

私は思はず叫んだ。そしてその瞬間、子供のやうに胸のときめきを覺えた。

どれもこれも小鳥のやうに生意氣に嘴を尖らし、どれもこれも小肥りに肥つて、はち切れさうに背を圓くしてゐる。

焦茶色の肌は、太陽の熱をむさぼるやうに吸つて、こんがり

「嘴を尖らし」

「背を圓くしてゐる」

と焼け上つた氣味だ。

唐木机の脚、かぶと蟲の兜、蟋蟀の太腿——強健なものは多くの場合に焦茶色にくすぶつてゐる。

唐木 もと支那を経て來たのでかう呼ばれるが、熱帯産の木材をいふ。

夏の末に雑木林を通ると、頭の上に大きな栗の毬がぶら下つてゐるのを見かけることがよくある。爆ぜ割れた毬の中から、小さな栗の實が頭を出してきよろ／＼してゐるのは、巢立ち前の燕の子が、泥の家から空をうかゞつてゐるやうなもので、その眼は物好きと冒険とに光つてゐるが、燕の母親がその雛つ兒たちを容易には巢の外へ飛出させないやうに、胸に抱へた子供たちの向う見ずな欲望を知つてゐる栗の毬は、滅多に自分のふところを緩めようとはしない。

\* 向う見ず

穀のなかに閉ぢ籠つて、太陽を飽食してゐる栗の實は、日に

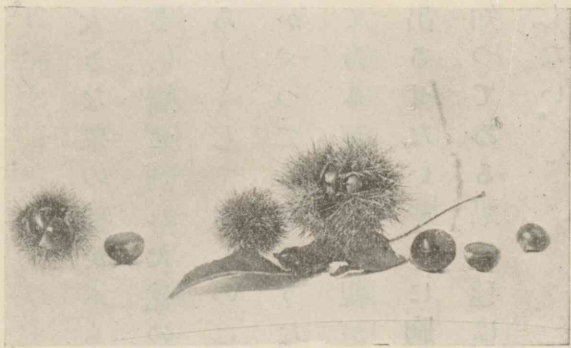
「太陽を飽食してゐる」

日に肉づいて往つて、われとわが生命の充實し、内壓する重みに持ちこたへられなくなつて来る。

實が殻から離れゆく秋が來たのだ。内部の強い動きから、毬はおのづと大きく爆ぜ割れる。

向う見ずの栗の實は、「まだ見ぬ國」にあくがれて、われがちに殻から外へ飛びだして来る。焦茶色の頭巾をかぶつた燕の子の巢立ちである。

あるものは靜かに枯葉の上に落ち、あるものは石にぶつかり、かちんと音を立てて、跳ねかへりざま、どこかに姿をかくしてしまふ。——どちらにしても、親木の



栗

\* 内壓

「まだ見ぬ國」

「焦茶色の頭巾をかぶつた燕の子の巢立ち」

立つてゐる場所から八尺とは離れてゐない。彼らはそれを少しも悔まない。彼らにとつて、ともかくもそこはまだ見ぬ國なのである。焦茶色の外皮の堅さは、こんな場合にもかすり傷一つ負はさない。

私はこんなことを思ひながら、栗の實の二つ三つを噛んで、それを火鉢の灰に埋めた。灰のなかからぷす／＼と煙がいぶり出して來た。

落梅の音

今年は梅雨前には、雨がひつきりなく降りつゞいたが、肝腎の梅雨に入つてからは毎日の好天氣で、自分の住まつてゐる近くの水田なども水不足で、田植が延びがちになり、宵ごとに聞く蛙の聲も何となく力がなかつたが、六月も末になつてか

「かすり傷一つ」

「蛙の聲も何となく力がなかつた」

ら雨は降出した。

初はしとくと降出した雨が、やがて底を抜いたやうな土砂降りとなり、それが二日も三日も四日も五日も、どうかすると九日も十日も降續くと、天地は雨の光と影と響とに壓倒されて、草も、木も、鳥も、獸も、野も、山も、また人間も、まるで小さな魚のやうに、押流されてしまひさうな、危なつかしい氣持を抱かせられる。この危なつかしさを孕んでゐるのが梅雨の特徴で、芭蕉の、

さみだれを集めて早し最上川

といふ句を讀んで、岸を浸さんばかりの濁り水が、矢のやうに早く走つてゐるのを想像して、眼が眩ひさうになるまでに水の力に驚くのも、この危なさの氣持を感じずからである。蕪

村の、

さみだれや大河を前に家二軒

も、またこの危なさの美を外にしては味は、れぬ句である。いつの年でも、梅雨に入つてどしや降りの大雨に、不安な危なつかしさを抱かせられる度毎に、私は喩へがたい一種の快感を覚えぬわけには往かない。

幾日か降續いた雨が、やがて降りくたびれる頃は、凡兆のいふ、

この頃は小粒になりぬ五月雨

で、長雨と大雨の憂鬱と不安とから救ひ出された、激情の後のぐつたりした疲れから産まれる明かるさといつたやうなもの、分毎に、秒毎に度を加へて來るのも、かうした時である。

「危なつかしさを孕んでゐる」

芭蕉 松尾氏。名は宗房。又幻住庵・桃青とも號した。正風(蕉風)の祖。俳人。元祿七年(一七〇二)歿、年五十一。最上川 山形縣の中部を流れ、酒田港に注ぐ。我が國三急流の一。

蕪村 谷口氏。後に與謝。名は四明。或は信幸。後、寅と改む。字は春星。夜半亭・三果等と號す。俳諧中興の人。又南畫派の畫家。天明三年(一八二二)歿、年六十八。『危なさの美』

凡兆 野澤氏。芭蕉の門人。正徳四年(一七三〇)歿。

「ぐつたりした疲れから産まれる明かるさ」

また降續き、降暮した雨が、いつか夜になつて人の寢靜まつた後に、こつそり霽れて、それがちやうど月のある頃で、庭木の

影が水のやうに窓硝子に浮かんでゐるのを、ふと眼が覺めて見る驚きなども、梅雨でなくては得られない趣である。

月の無い、まつたくの闇の一夜、夜が更けて寝つかれないのであると、さきがたから降細つた雨はいつしか止んで、草木といふ草木は、



生寫梅青 筆規子岡正

雫のたれる濡れ髪を地べたに突伏したまゝ、起上る力もなく、へと／＼になつてゐる靜かさの底で、ぼたりと何ものか地べ

「人の寢靜まつた後にこつそり霽れる」

「靜かさの底でぼたり」

たに落ちるのを聞きつけることがよくある。

熟梅の一つが枝を離れた音である。

私はどんなときでもこの音を聞きつけると、梅の實が自分の心の深みに落ちて來たかのやうな驚きとなつかしみを感ずる。なに一つ動かない、閑寂そのものの微かな溜息が、樹の枝を離れて、眞直ぐに私の生命の波心にさゝやきに來たやうな感じである。

むかし小堀遠州は、古瀬戸の茶入、伊豫すだれを愛玩して、これを見ると、心はいつでも「わび」を感じるといつて、暫くの間も座右を離さなかつた。その子權十郎はまたその小壺に書きつけをして、

「昔年亡父孤蓬庵主小壺をもとめ、伊豫すだれと名づけ、その

「心の深みに落ちて來たかのやうな」

小堀遠州 名は政一。茶道遠州流の祖。正保四年(1653)歿、年六十九。古瀬戸 後堀河天皇の安貞年中、尾張國瀬戸の陶工、加藤四郎入道春慶の焼きはじめた磁器。茶入 茶の湯にて、抹茶を入れる小さな器。「わび」

形たとへば編笠といふものに似て、物ふりて侘し。それ故に古歌をもつて、

あふことはまばらに編める伊豫すだれいよい

よ我をわびさするかな

我が愚かなる眺にも、これを思ふに忽然としてわびしき姿なり。また寂寞たり。まことなるかな、青苔日々にあつくとあるも然り。年月をふるといへども、こと訪ふ人もなく、安閑の境界は却つて樂を招き、富貴を願はず、我が惑はぬ年をこそ、秋の夜の長きに老の寢覺のつれづれに思ひ出してしるし侍る。」

といつてゐる。これで見ると、孤蓬庵父子はこの小壺に對すると、その形を見ただけでもう「わび」の心もちに入ることが出

あふことは 詞花集  
卷八の惠慶法師の  
歌。

「青苔日々にあつく」

\*老の寢覺  
\*つれづれ

來たものと思はれる。

私が梅の實の熟えて落ちる音を好むのも、つまりそれで、その音を聞くと、忽然として閑寂のふところに侘びの心持を味はふことが出来るからである。私が梅の樹に取圍まれた郷里の茅屋に、いまだに斷ちがたい愛着を感じてゐるのも、それ一本の梅の木もない今の借家に絶えず物足りなさを抱かせられてゐるのも、それ。また軒端の梅は實を採るものでなく、音を娛しむものとしてゐるのも、それゆゑである。(艸木蟲魚)

「忽然として閑寂のふところに侘びの心持を味はふ」

\*愛着

「音を娛しむものとしてゐるのも、それゆゑである」

杏が熟れて落ちるのか、月夜の畑に音がする。

草木も眠つた夜なかごる、誰も知らない音がする。

(島木赤彦)

島木赤彦 アラ、ギ  
派の歌人。大正十  
五年歿、年五十一。

## 二 ギリシャの旅

安倍 能 成

安倍能成 哲學者。  
京城帝國大學教授。  
明治十六年生。

宿に歸つて午食、アクロポリスを一見すべく又出かけた。市場の側からアクロポリスの北麓を廻つて、西側から上つてゆく。今日は日曜で自由に入場し得るからであらう、石段に登る老若男女の数は實に多い。これ等のギリシャ語——昔のギリシャ語と少しは變つて居ても——を話す男女を、ペリクレス時代に移して空想するのも愉快でなくはない。イタリヤ語の母音を強くいふしつこさ、イタリヤ人の持つ聲の太さに比べると、彼等の詞が輕快に且澄んで聞えるのも、この場合氣持がいゝ。アクロポリスの麓には小さな針葉樹に交つて龍舌蘭が生えたり、所々に橄欖が梢を擴げたりして居るが、

丘全體は見るからに岩骨の稜々たる上を更に石で固めたといふ感じが深い。先づ初めにビュレ門を潛ると、眞正面にプロピュライヤの石柱の林立が仰がれて、左右の方形の石垣さうしてその右側に寄つて狭い石段が新たに設けられて居るに過ぎない。そこを上つてプロピュライヤを入ると、丘上に見るものは、先づ小さく優美な、白い、女性的なエレヒティオンと、さうして大きくどつしりと底つ岩根をふまへて立つ偉丈夫のやうなパルテノンとであつた。パルテノンの日を浴びた圓柱は黄色に金色を帯び、その間から見える思ひ切つて濃青に澄んだ空の色との對照が實に明かるく、深く、美しく、嚴かであつた。丘の南麓にはヘロデアスアッティクスの樂堂とデイオニユ

アクロポリス ギリ  
シャ語。Acropolis  
高都(城壁を以て繞らした高地にある都)の義。  
アテネのアクロポリスが最も有名。  
単にアクロポリスと云へばアテネを指す。ヘルシヤ戰役の時ヘルシヤ軍之を破壊す。アテネの南方にあり。  
ペリクレス時代 アテネの最も優れた政治家ペリクレス(Pericles)の現れた時代。ペリクレスは貴族の出なるも民黨に投じ民衆をよく指導し國民の信を得。古代に於ける文運の最高潮期をもなす。  
西紀前四九九年生 同四二九年歿。

ビュレ門 ローマ時代に成りしもの。トルコ人の建てし城塞の下に埋もれてあつたのを、十九世紀半頃に發見した。

プロピュライヤ

Propylaea. アクロポリス丘上の神域の前門として有名なもの。  
「プロピュライヤに入る」

エレヒティオン

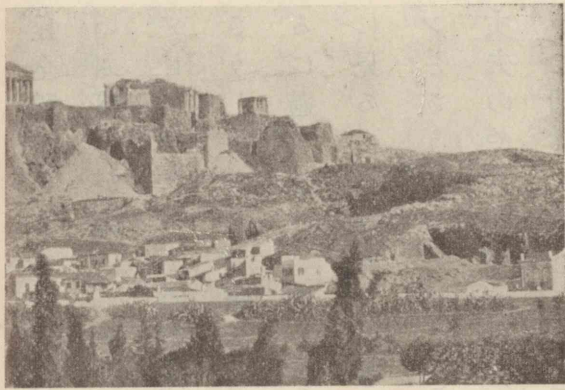
Erechtheion. アクロポリス丘のある處女神アテナとエレクテウスを祀る神殿。西紀前四八〇年ヘルシヤ軍に燒かれ後再築さる。

パルテノン

Parthenon. アテナアクロポリス丘上にある祠堂(處



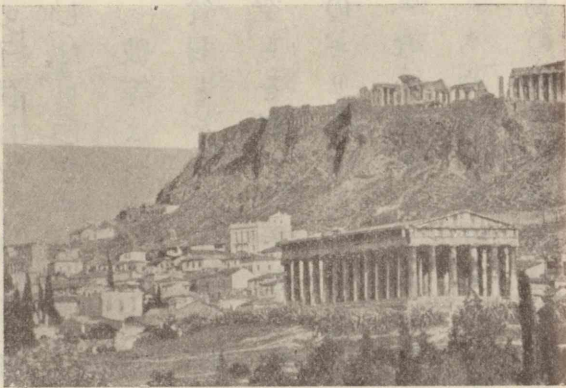
ソスの劇場の半圓形の見物席とが見え、それから少し東の大きな廣場に十數本の高い圓柱を並べて居るオリュンピエイオンのあたりには、蟻のやうに澤山の人だかりが見える。オリュンピエイオンの側には、薄つ



(一其) 丘のスリボロクア

つて居る。それに續く公園と宮園との縁は大分塵を浴び、王宮の上には頂上に寺のやうな建物を頂いた三角形の岩山リュカベトスが聳え立つて、それから南の方には、形はなだらかだが大理石の岩骨を底の方からほの白ませて

女神アテナの神殿。世界、古今、東西を通して最も完全なる美を表現した建築。現祠堂はペリクレスの再建に依る。  
「丘の南麓」  
ヘロデアスアッテイク  
建物で、杉板で見物席を蔽つたものといはれる。  
ディオニッソス  
Dionysian Theatre.  
南麓の傾斜地にある典型的古代ギリシャ劇場の一。前三四〇年完成。ローマ時代に改造され一萬數千の観客を容れ得るといふ。  
オリュンピエイオン  
Olympieion. アクロポリスの南東にあり。シユピター・オリンピラスの神殿。西紀前五三〇年起工、同一七年ハドリアヌス皇帝により完成。



(二其) 丘のスリボロクア

居るやうな、ヒュメトスの山が長く續いて居る。この丘に對して西南に、頂上に白い記念塔を頂いた山はムセイオンであらう。その北側に低いのはアレオパゴスである。ずつと眺めた景色が、イタリヤの町の明かるさにカイロの町の黄濁を加味したやうな、熱帯的な所がある。これは恐らく

ハドリアヌス  
Publius Aelius Hadrianus. (76-138). ローマ皇帝。イスパニヤの名門の出。西紀一七七年即位。

カイロ Cairo. エジプトの首府。回教文化の中心。新、舊市街に分れ、史跡頗る多し。

ドラム Drum. コリント式或は混合式柱の石の層。

土が乾き過ぎて、樹が割合に乏しく、ほこりがひどいせいであらう。

パルテノンはその北側も西側も、圓柱のドラムやその他の

破片に充ち／＼て居る。今のアテナイの市民達は、昔のアテナイ市民の残したこの廢墟の斷片に思ひ／＼に腰をかけて、ぼか／＼煙草をふかしたり、互に談笑したりして居る。彼等の子供は又子供で唱歌をうたつたり、石の下で何か捜し物をしたりして居る。

彼等はいかうして彼等の祖先の過去の偉大と彼等の現在の貧弱とを比べて思ひ煩ふこともなく、現前の麗しい日と青い空とを楽しんで居るのであらう。尤も祖先といつても現在のギリシヤ人は、人種上嚴密には昔のギリシヤ人の子孫といへないであらうが。

ちやうど日はピラエウスの入江の彼方、ペロポネソス半島の山へ大分傾いて來た。パルテノンは愈、金色の輝きを益

して、その西側の狭い口から洩れる空の色は益々美しくなつた。やがて日が入つてその上の空がぱつと一時に紅くなつた。同時にパルテノンは急に酔から醒めたやうに蒼白な凄味を示して來た。

日没と一緒に人を拂ふ鐘が鳴りだした。さうして私も人と共にこの丘を下つた。(ギリシヤとスカンディナヴィア)

アクロポリスの正面の石門下の段階を登り、一路神殿に通ずる所、左右に歴史上の偉人物を大理石像として併立してあつた。日本人は山門内外の直通を樹木鬱蒼たる竝木となし、これによつて神殿佛堂に近づくに先立ち、人の心を森嚴ならしめる。彼は人の心を偉人化せしめんとし、我は人の心を天然化せしめようとする。一言にしていへば、日本人は宗教的建築に於ては、自然の風光に對する愛好を離れることが出来ない。

(松本亦太郎)

松本亦太郎  
文學博士。群馬縣  
の人。慶應元年(二  
五三)生。

「今のアテナイ市民」  
アテナイ Athens.  
ギリシヤ共和国の  
首府。往古著名な  
るヘレネスの中心  
都市。現在のアテ  
ネは古代アテネの  
北部と東部とを占  
め、考古學研究の  
國際的中心地とな  
す。

ピラエウス  
Piræus. アテネ  
の南西約九軒にあ  
り、その外港をな  
す。  
ペロポネソス半島  
Peloponnesus.

### 三 風 鈴

大 谷 繞 石

大谷繞石 名は正信。英文學者・俳人。昭和八年歿、年五十九。

或人の贈つてよこした、半鐘形の支那渡來の鈴のあることを思ひ出して、これを風鈴に造つて、座敷の廂に吊した。いゝ音を出す。

庭はこなひだ草むしりしたばかりだから、清々してゐる。

まんべんなく打水する。それから行水を遣つて、廣袖の浴衣を着て、縁に出て、ぼんやりと庭を眺める。暮れるにはまだ早い。

風鈴がちりゝんちりゝんと涼しさうだ。

店の内はいつも打水に濕つた敷石、中央には場所の割合に

\*まんべんなく

大きな泉水池には金魚が幾匹か尾を重さうに振はせて泳いでゐる。岩の小島には、その島の幅の三倍も高さのある鐵製の鶴が立つてゐて、頭の頂點から高く水を噴きあげてゐる。

白大理石の圓テーブルに對つて、雪白のエプロン掛けた少女の持つて來た氷水の堆いのを、銀匙でさく／＼とコップへ突入れる。波に千鳥の模様を青い硝子玉で、その他は無色の硝子玉で造つた、廂の淺い簾の外の吊葱つしやぶから下つてゐる風鈴がちりゝんちりゝん。

エプロン Apron.  
前掛。

吊葱 葱草を種々の形に作りて、軒端などに吊したるもの。

町中とはいへ、寺のことだから、書院も天井が高い。土塀近

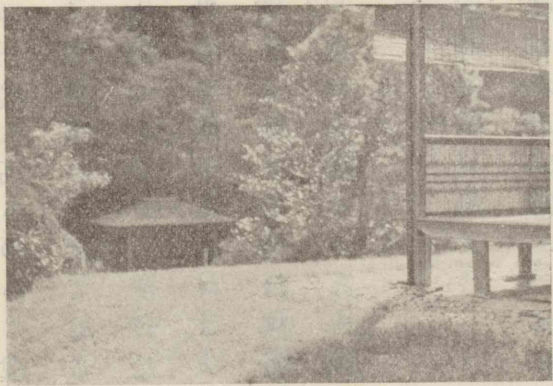
\*書院

くには躑躅萩など植わつてゐるが、その廣い砂庭には、秋には或は黄色に或は眞赤になる葉鶏頭が、すい／＼と立つてゐる。

だけ。本堂の蔭になつて、日の光は當つてをらぬ。

その書院に、大方は飛白の單衣の若い男が七八人、勝手な處へ草座蒲團を持つていつて、それに胡坐をかいて、じつと庭に見入つてゐるもの、立膝を兩手で抱へて眼を塞いでゐるもの、腹這になつて頻りに手帳に何か書きつけてゐるもの、その姿態は人さまざまだが、誰一人口をきかぬ。學生の俳句會でもあらうか。

時折のそよ風に扉際の躑躅萩の



庭の夏

葉が揺れ、葉鶏頭の莖が動くと同時に、軒に吊した風鈴がちり

りんちり、ん。

い、月だと、更けた月を雨戸一枚繰つて眺める。空は氷のやうだ。月は折から庭の青桐の木末に懸つてゐる。或一枚の廣葉の蟲の喰つた穴が、大小二つ判然と見える。近處は寢靜まつてゐる。この長旱に涸れもせぬ門川の淙々たる瀨音も、こゝ裏庭にゐては音が弱い。時折蝸に似た河鹿かじかの朗かな聲が、川の上手に聞える。無いやうだが、葉を揺すぶる程の風はあると見える。

(北の國より)

\* 胡坐をか

\* 淙々たる

河鹿 兩棲動物。蛙に似て瘡せ、汚色を呈し、指端に吸盤を有す。山地の清流に棲み、夏秋の頃美聲を發して鳴く。

一三 雲のいろく

幸田露伴

幸田露伴 名は成行。文學者。文學博士。慶應三年生。

夜の雲

夏より秋にかけての夜など、美しき言ふばかりなき雲を見  
ることあり。都會の人多くは心づかぬなるべし。舟に乗り  
て灘を行く折、天暗く水黒くして、月星の光も洩れず、舷を打つ  
浪のみ青白く騒ぎ立ちて、心細く覺ゆる沖中に、夜は丑三つと  
も想はるゝ頃、舟の上に獨り立ちて、海風の面を吹くがまゝ、衣  
袂濕りて重きをも問はず、寝られぬ旅の情を遣らんと、詩など  
吟ずる時、いなづま忽として起りて、水天一齊に凄まじき色に  
明かるくなり、千疊萬疊の濤の頭は、白銀の簪したる如く輝き  
立つかと見れば、怪しき岩の如く、獸の如く、山の如く、鬼の如く

丑三つ 丑滿とも書  
く。今の午前三時  
近き時刻。

「いなづま忽として  
起りて、水天一齊  
に凄まじき色に明  
かるくなり」  
\* 白銀の簪

空に峙ちわだかまり居し雲の、皆黄金色の笹縁つけて、いと嚴  
かに人の眼を驚かしたる、言はんかたなく美し。

雨後の雲

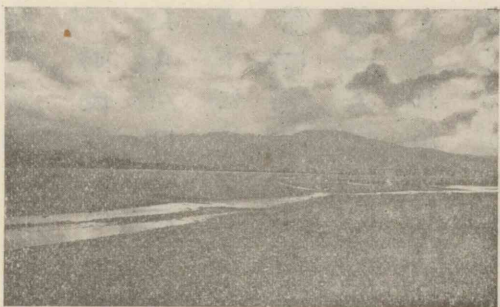
雨後の雲の美しさは、山にてこそ見るべけれ。低き山に居  
たらんには、なほかひなかるべし。名ある山々をも眼の前脚  
の下に見るほどの山に在りて、夏の日の夕など、風少し有る時  
谿に望みて遠近の雲の往來を觀る、いと興あり。前山の翠の  
色一入増して、裾野の風情も見所多く、一廓なせる山村の寺な  
ど、それかとも見ゆるに、濃く白き雲の足疾く風に乗りて空を  
翔くるが、自己の形をも、かつ龍の如く、かつ虎の如く、翻りたる  
布の如く、張りたる傘の如く、さまざまに變へつゝ、山を蝕み、裾  
野を被ひ、山村を呑みつ吐きつして、前なるははふやうに去る

\* わだかまる  
「黄金色の笹縁つ  
ける」

「濃く白き雲の足疾  
く風に乗りて空を  
翔くるが」

「山を蝕み、裾野を被  
ひ、山村を呑みつ  
吐きつして」

かと思れば、後なるは飛ぶ如く来りなんどする状、観て飽くといふことを覺えず。小山の峯通りに立てる松の竝木の遠見



雲の後雨

には馬の鬣のやうなるが、現れつ隠れつし、金字塔形したる山の嶺の心あてに見しあたりならぬ所に、突として面を出す、殊に面白し。

蝶々雲

風吹く時、離れくになりたる大からぬ雲の色白き、或は薄黒きが、蝶の如くひらくと風下へ舞ひつ飛びつ

して行くあり。蝶々雲とは面白くも名づけたるものかな。その實も風情あり、その名も亦風情ありと謂ふべし。

\* 金字塔  
心あてに 村田春海  
の歌に「心あてに  
見し白雲はふもと  
にて思はぬ空に晴  
る富士の嶺」

「ひらくと風下へ  
舞ひつ飛びつして  
行く」

ぬのこ雲

蝶々雲は古き歌に見えたりや否や知らず。ぬのこ雲といへるは仲正の歌に見えたり。夏の夜秋の夜など、雨もたぬ空の晴れたるに、一叢の雲の冢の如く丸く肥えて見ゆるが、月のおたり走り行くは、人々の知るところなるが、これも亦風情ある雲なり。



雲のぬのこ

雲はらふ月の光に追ひにけりはしり散りぬるぬのこ雲かな

と詠める歌は、面白しとも思はれねど、ぬのこ雲といふ名を傳

仲正 源氏。後撰集の作家。

「はしり散りぬるぬのこ雲かな」

へたる功は、この歌にあるべきにや。

雲のわざ



雲のするわざも多きが中にいと面白  
きは、冬の日の朝早く、平かにわたれる雲  
の、谷を籠め、麓を蓋ひて、世の何物をも山  
の上の人には見せぬことなり。日輪未  
上だ出で給はず、月落ち、星の光薄れながら、  
山天なほひとしきり暗き頃、山高き所に宿  
りたる身の、萬づの物珍しきに、例になく  
夙く起出でて、戸なども自ら繰り、心締む  
るやうなる寒さを忍びて、眼を放つて見  
渡せば、きのふは脚の下に麓路の村も晝

の如く小さく見え、川の流の白きが、絲ほどに細くそれと知れ、  
深き谿を隔てて、かれこれと名ある山々の數多く連なり立ち  
たるが眼に入りしに、今は我が立てる處を去る幾許もあらぬ  
下より、遙かに向うの方、際涯知らぬあたりまで、平かにして大  
江の水の如くなる白雲たなびき渡り、村も隠し、川も隠し、山々  
谿々も隠しはてて、下界を海の底に沈め盡くせるが如くに見  
せたる、雲のわざとは知りながら、さすがに馴れぬ眼には驚か  
るゝものなり。

「開門忽怪山爲海。萬疊雲濤露一峯。」

と詩にいへるも、誠によくいひ得たりといふべし。

雲中の夢

上にあげたる如き白雲の中に眠りても、人の夢はなほ塵境

\*際涯

「下界を海の底に沈め盡くせるが如く」  
\*見せたる

「露一峯」

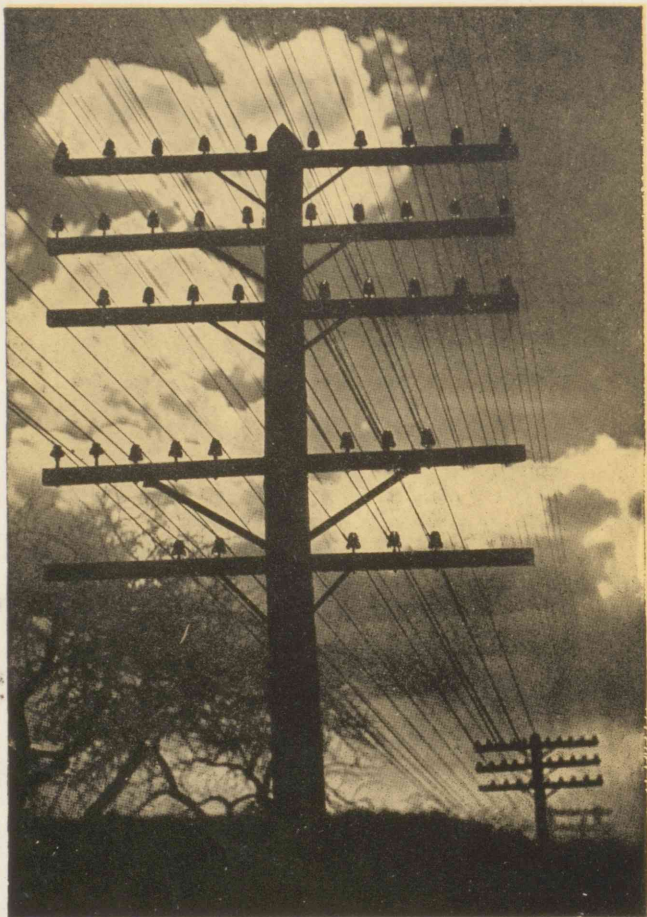
「塵境に迷ひて」

に迷ひて、愚かなる事をのみ見るものなり。  
 白雲の中にいねても山を出でてちりの街にかよ  
 ふ夢かな  
 とは、我が或時の實際を詠みたる吟なりき。(調言)

野の末の夕立雲はひろごれり足もとにゆら  
 ぐひるがほの花  
 ゆく秋のやまとのくにの薬師寺の塔のうへ  
 なるひとひらの雲

(佐佐木信綱)

佐佐木信綱 歌人。  
 文學博士。明治五  
 年生。



雲のいろく



#### 一四 アイヌの部落

金田一 京助

明治四十年の夏のことである。小樽を立つたのは七月の十二日、樺太の奥山には木立に交つて山櫻がちら／＼咲いてゐる頃であつた。

大泊に船待ちをし、毎日濃霧を託ちながら、やつと米と味噌とを用意して、役所の見巡りの小蒸氣に乗つけて貰つて、目指す東海岸へ船出をしたのは十二日目。それでも海の上はまだ霧が深く、三晩船の上に寝て、二十七日の朝に、やつと本船のボートで送られてオチヨボツカのアイヌ部落へ最初の足跡を印したのである。

併し、思ひに思つて遙々訪ねて来たものの、私などは部落の

金田一 京助 文學博士。言語學者。東京帝國大學助教授。明治十五年生。小樽 北海道の商工都市。主要なる貿易港。

大泊 亞薩灣の北奥千歲灣の東岸に臨み、樺太第一の開港場。本島海陸聯絡の重要地。昔、コルサコフ又ボロアントマリと稱した。

オチヨボツカ 富内郡富内村字落帆。

「思ひに思つて遙々訪ねて来た」

人々に取つては、面白くも可笑しくもない、何處からかまごまごして来た犬ころ程の興も惹かない存在だつた。愁に、民政署の船に乗つて来た洋服姿などは、意地悪な役所の看守人でもあるかのやうな氣分をさへ興へて、ともすれば一寸疑ひ深い目を光らせ、私の行く所、立つ所、誰もみな背をむけてしまひ、口をつぐんでしまふ。笑ひさだめいてゐた者も笑ひを收め、寄合つてゐた者も散じてしまふ。その寂寥さは譬へやうもない。皆目言葉が通ぜず、片言隻語も採集出來ずに空しく一日が暮れてゆくのである。

役所の船から下りたものだから、居る所だけは、酋長ビシタクの冬期の住家を、がらんどくに明けて、一人ぼつんと居らしてくるのである。又三度々々の食事は、同じ様に髪を垂ら

民政署 明治三十八年軍政の下に設置され、同四十年樺太廳が置かれて廢止された。  
「意地悪な役所の看守人でもあるかのやうな」

\* 片言隻語

した入墨の娘が来て、だまつて私の米と味噌とを小鍋へ入れて持ち去つて、一時間もすると、煖かい飯と汁とを作つて黙つて置いて行つてくれるのである。但し物を言ひかけたら最後、ぐんぐん逃げて行つてしまふ。晝の内は、まだ繪に描いたやうなアイヌの姿を目のあたり見てゐるばかりも慰めとなつたが、夜になると、鼻をつまられるのも知らないやうな闇の中に、磯うつ浪のざあと引いて行く侘しい音のみを聞いてゐると、物言ふ相手もない淋しさが込みあげて、啞の上に盲にさへ生まれて来たやうな境涯を感じた。

二日目も同じやうに暮れ、三日目も又それを繰返さなければならなかつた。

四日目の事だつた。淋しさは、もはや單なる淋しさではな

「啞の上に盲にさへ生まれて来た」

く、東京を立つて一ヶ月、遂に何の得る所もなく歸らなければならぬのだらうか。その不安の憂悶が頭をかき亂して茫然として屋外に立つた丁度その時――



太樺のマイヌの俗風

ふと見ると、後に子供達が何か喚きながら無心に遊んでゐた。行くともなく、その方へ引寄せられて行つたのは、言葉の一はしでも拾ひたかつたからである。じつと耳を傾けると、何といふ發音だらう。しやつくりしながら物言ふやうな喚き様で、ひと言だつて耳に止らない。但し子供だけに、私が近くに立つても、別に氣にもせず、夢中に囀つて遊んでゐる。ふと、その一人の腰に下つてゐ

\*憂悶  
「茫然として屋外に立つた」

る小刀に觸つて、タンベ・ネツフ・ネルエへアン？其れは何なの？と訊ねて見た。子供等は一齊に私の顔を見た。と思つたら、一度にわつと噓し立てて、蜘蛛の子を散らす様に逃散らかつた。

「通じないかな」獨りつぶやきながら途方に暮れてゐると、又三々五々集つては何か大聲に喚きながら遊ぶのである。又寄つて行つた。今度は言葉を換へて一人の子の耳に下げた環を指してマカナクアイエフ・ネルエ？(何と言ふものか?)と問うて見た。又振返つて全部の子供が私を仰いだ、が「なあに言つてあがる」と云つた調子に、わあ！と喚いて逃出した。子供等の内に、繪に見る唐子のやうな着物――多分滿洲方面からの外來品――を着てゐるのが一人あつた。その恰好

「わあ」と喚いて逃出した」

が一寸面白かつたので、單語を採集する筈の手帳へ、しよう事なしに、その子を寫生し始めた。

私が、その子を見ては鉛筆を、動かし動かしするのを目さしく見つけた子供の一人が、先づ何とか喚いた。他の子も私を見て、又何とか喚いた。遊ぶのを止して、みんな私を注視した。眞先に見つけた子が、まづ怖々と、しやがんでゐる私へ近寄つて来て、物珍しげに私の描くのを覗いた。忽ちどや／＼やつて来て、みんなで覗いた。年かさのが、唐子の服装をした子を指して「お前が描かれたぞ」とでも云ふやうな様子をした。すると、わい／＼言出して、私の横から覗くもの、背後から覗くもの、中には無遠慮なのが、指を突出してもう私の畫面をつゝいて「こゝが頭で、こゝが足だ、手だ」などといふやうに、自分の發見

「單語を採集する筈の手帳」

「指を突出してもう私の畫面をつゝいて」

を得意になつて、説明を引受けてゐるのさへある。が、ちつともその言ふ事が聞きとれない。

其の時だつた。ふと思ひついて、一枚新しい所をめぐつて、誰にもすぐ解るやうに、大きく子供の顔を描いて見た。目を二つ並べて描くと、年かさのが一番先に「シシ」「シシ」と言った。

他の子も「シシ」他のも「シシ」とう／＼差覗いてゐた子の口が皆「シシ」「シシ」「シシ」、騒がしいつたらない。その状は丁度「目だよ、目なんだよ」「うん、目だ」「目だ！」「目だ」とも言ふやうに聞けたのである。

「騒がしいつたらない」

さうだ、北海道アイヌは「目」をば「シク」といふ。樺太では其れを「シシ」といふのかも知れないといふことが頭へ閃いたから、急いで畫の目から線を横へ引つばつて、手帳の隅の所へ「シシ

と記入し、それから悠々と鼻を描いて行つた。年かさの兒が鋭い聲で「エトウプイ！ エトウプイ！」と叫ぶ。と、残りの兒等も聲々に「エトウプイ！ エトウプイ！」。私は可笑しくなつたのを堪へて、又鼻の尖端から線を引いて行つて其の端へ「エトウプイ！」と書込んだ。そして口を描いてゆくと、やつぱり年かさの兒を眞先に「チャラ！」「チャラ！」と大騒ぎ。眉を描くと「ラル！」「ラル！」。頭を描くと「サバ！」「サバ！」。耳を描くと「キサラプイ！」「キサラプイ！」。

忽ちの内に、支體の名が十數個、期せずして採集が出来た。可笑しいやら、愉快やら、かうなつたら、もう何でも無い。競争して向うから言つて呉れるのだから。

「競争して向うから言つてくれる」

ば、心の儘に、物を指して、その名を聞くことが出来るのである。そこで、ふと思ひついて、もう一枚紙をめくつて、今度は滅茶苦茶な線をぐる／＼ぐる／＼引廻した。年かさの兒が首をかした。そして「ヘマタ」と叫んだ。すると他の子供も皆變な顔をして、口々に「ヘマタ！」「ヘマタ！」「ヘマタ！」。

「うん！ 北海道では『何』のことをヘマダといふ。これだ」と思つたから、まづ試みよう、と、身の圍りを見廻して、足もとの小石を拾つて、私からあべこべに「ヘマタ？」と叫んでやつた。

驚くべし、群がる子供らが私の手元へくる／＼した目を向けて、口々に「スマ！」「スマ！」と叫んだではないか。

北海道では石のことをシユマといふ。して見ると、スマは石のことで、そして、ヘマタはやつぱり「何」といふことに違ひな

ささうだつたのである。  
 ここで勇氣を得ても一つ足許の草を手に撈り取つて、ヘマ  
 タ? と高く捧げると、子供達はムン! ムン! ムン!  
 と、ぴよん／＼跳ねながら答へる。私は嬉しさに、子供等と一  
 緒にぴよん／＼跳んで笑つた。

可笑しかつたのは、私が自分の五厘ぐらゐしか無い七八本  
 の顎鬚を摘まんで見せて、「ヘマタ?」と訊ねた時である。聲に  
 應じて、子供等は「ノホキリ!」と答へてくれた  
 ので、Nohkiri「顎鬚」と記入した。何ぞ知らん Nohkiri は「下あ  
 ご」だつた。鬚面に馴れてゐるアイヌの子供達の目には、私の  
 摘まんだ髻などは「鬚」の數に映じなかつたので、私の指は「あご」  
 を摘まんでると思つたのである。

「ヘマタ? と高く捧  
 げる」

「子供等と一緒にび  
 よん／＼跳んで笑  
 つた」

併し、私はかうして、忽ちの内に、七十四個の單語を採集して  
 元氣づいた。折柄、河原に集つて鱒を捕へてゐる大勢の大人  
 達の所へ下りて行つて、覺えたばかりのほや／＼單語を勇敢  
 に使つて見た。

川原の石を指してスマと叫び、青草を指してムン、鱒を見て  
 はへモイ、鱒の頭を指してはへモイ、サバ、鱒の目を指してへモ  
 イ、シシ、鱒の口を指してへモイ、チャラ!

これまで、むづかしい顔ばかりしてゐた鬚面が、もぢや／＼  
 の鬚の間から白い齒を現した。これ迄そむけ／＼してゐた  
 婦女子の顔にも、眞青な入墨の中から白い齒が見えた。明か  
 に皆笑つたのである。中には向うから、網を持つてゐる手を  
 振つて見せて「ヤ」網と云つたり、砂地を指してオタ(砂)と云つ

「ほや／＼單語を勇  
 敢に使ふ」

「入墨の中から白い  
 齒が見えた」

たりしたのもある。急いで手帳に書きつけながら、その發音を眞似すると不思議相に手帳を見に寄つて來るものもあつた。婦女子の群では、何時覺えたらうとか、よく覺えたもんだとか、いふやうな感歎の聲らしい聲をあげたものもあつた。たつた、かうした間に、私に全舞臺との間を遮つてゐた幕がいつべんに、切つて落されたのである。さしも超え難かつた禁園の垣根が、はたと私の前に開けたのである。言葉こそ固く鎖した心の城府へ通ふ唯一の小徑であつた。渠成つて水到る。茲に到つて、私は何物をもためらはず、凡てを捨てて驀まう地にこの小徑を進んだのは、殆ど狂熱的だつた。

一週間の後には、一寸私が首を出しても、右から左から言葉を投げられる。朝起きて川原へ顔を洗ひに手拭タワシを下げて前

\* 唯一の小徑  
\* 渠成つて水到る  
「驀地にこの小徑を進んだ」

タワシ Towel.

を通ると兩側のアイヌ小屋からナツケネエオマン・クス？（どこへ行きますか）、テマナエキ・クス？（どうしたんですか）などと、まるで田圃の蝗が飛出すやうに、ばた／＼と足もすくむ程、詞を懸けられて、私が巧く答へられたと言つては笑ひ、とんちんかんに答へたと言つては笑ひ、顔を洗つてゐると、もう子供が起きて後へいつばいやつて來てゐる。夜は若い者や年寄が、さしもがらんだうな私の宿も身動きもならない程詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る。

「田圃の蝗が飛出すやうに」

「詰めかけて、踊る、歌ふ、喋る」

四十日滞在の後に、大抵の話は支障がなくなつた上、樺太アイヌ文法の大要と、語彙と、北蝦夷古謠遺篇三千行の敘事詩の採録を家苞に、私は、生涯忘れがたい思ひを残して此の部落の老若に別れを告げた。

（北の人）

\* 語彙  
\* 家苞

二五 盆燈籠

饗庭 篁村

文化元年の頃とか、小石川に庄助と呼ぶ男住めり。生まれつき愚直にて、日傭又はかつぎ商ひなどして世を渡りしが、七月十二日の朝、小石川某寺の門前に立つ草市へ行燈々籠といふものを持行きて賣りけるに、如何にしけるにや、買ふもの更になく、賣れしはわづか十ばかりなれば、力を落し、情なき顔して擔ぎ歸りしが、南畝翁方へは常々出入るものゆゑ、歸りがけに立寄りて、臺所の者に向ひ、偕々困ることかな。この盆は如何にして過し申さん。今朝の市にこれほど燈籠賣れ残り候。この分にては明朝神樂坂の市に持行き候とも、また今朝の如くなるべし。もとより手細工にせしことにはあれど、聊か資

饗庭篁村 名は與三郎。竹の屋とも號す。文學者。大正十一年歿、年六十八。

文化 光格天皇の御代の年號。(西曆一七九七)。

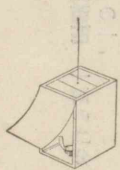
某寺 此は傳通院の名を以て知られてゐる無量山壽經寺のこと。淨土宗の大伽藍。東京市小石川區表町に在る。

「力を落し、情なき顔して」

南畝翁 幕府の士。本名は大田單。直次郎と稱し、南畝。蜀山人などと號した。狂歌をよくす。文政六年(西曆一八二五)歿、年七十五。神樂坂 東京市牛込區。

「水も吞まれ申さず」

盆燈籠



蜀山人筆蹟

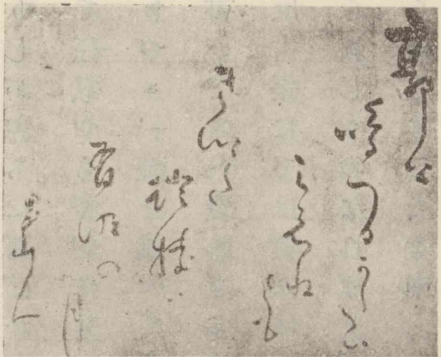
郭公鳴つるかたはみえれどもきいた證據は有明の月

蜀山人

「願が乾きては難儀ならん」

本もかゝりたり。この分にては水も吞まれ申さず。」とか、ちけり。

南畝翁は座敷にて之を聞かれ、手に持つ杯を下に置きて、「か



蜀山人筆蹟

の聲は庄助にあらずや。何事を申すにや。」と問はるゝにぞ、傍のもの、「かやう／＼にて、又かのぐづ男が泣き申し候。」と答へければ、翁は臺所に出でられ、さても氣の毒なることよ。願が乾きては難儀ならん。我がいふごとくせば、少しは賣るゝこともあるべし。」といはれければ、「それは有難きことに候。いかに致すべきか。」と、翁の顔を如何にも有難げに仰ぎ見て問



ふに翁は白紙を五帖ばかり取出し、これにてその燈籠を張替へよ。我それに何か書きてやらん。」といはる。悦びて立歸りしが、忽ちに百ばかり張替へて持來たれば、翁は例の草書にて、狂歌やら發句やらなぐりつけて渡されしに、庄助は頭を搔きつゝ、一禮を述べて荷ひ歸りながらも、蓮の花を紅入りにて書いてさへ賣れざるに、いかに先生なればとて、かゝる冗書ひだりの反古張にては買人はあるまじ。さりながら、あれほどに仰せられしものなれば、まづ明朝神樂坂の市に持行き、賣れ残りたらば、そのことを申して歎きつき、二百匹も借りて外商ひの資本とせん。」と工面顔にて、足も重く二三町歩む向うより、侍一人來かゝりしが、供のものに言ひつけて、その燈籠は賣物か。」と問はしむ。儲はと悦び、いかにも賣物に候。やうく傳つたを

\* 狂歌  
\* 發句  
「なぐりつけて渡されしに」  
「頭を搔きつゝ一禮を述べ」

二百匹 一兩の二分の一。

\* 工面顔

求めて先生に書いて貰ひ申したるにて、心あてもありて拵へ候なれども、このやうには入り申さず候。お望ならば差上げ申さん。」といふに、價はいかほどぞ。」と問ふ。幾許といひてよきことやら、庄助はたと行詰りしが、思ひ切つて「五十文。」といふ。「その値にて二つくれよ。」とて百文渡して買ひ行きたり。又後より通りかゝりし人、それ賣るならば買ひたし。」といふ。今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」といふ。いふがまゝにまた買ひ行きたり。後よりまた、此方へも二つ。「我にも一つ。」といふ有様にて、おのが家に歸るまでに二十許りも賣りて、凡そ一貫二百文、骨折らずに取り、かくと女房に話せば、「誠に寝惚様は生佛様なり、有難きことなり。明日は早くより持出で給へ。私も参りて手傳ひ申さん、一人にては手が足る

「今度は息を一杯に吹きて、「六十四文。」といふ」  
六十四文 百文の四分の三。當時は、九十六文といつて、九十六文を百文と稱した。それと物の値段は大抵八文、十六文、三十二文、四十八文、五十四文といふ。六十四文、九十六文（即ち百文）と半端になつた。  
一貫 昔は一十文、後世は九百六十文。

まじ。一つ盗まれても五十と百の損なり。と、女の智慧の慾が先なり。

夫婦は翌朝早起して神樂坂に到り、竝ぶる間もなく、蜀山人の書いたる燈籠とは珍し。」と、立止りて價を問ふ。庄助思ひ切つて「百文」といへば、「さもあらん。」とて買ひ行く。女房夫の袖を引き、百にても値切らずに大勢買つて行かるゝからは、二百文といふとも賣れ申さん、二百文といひ給へ。」と、又智慧をつくるに、庄助額に手を加へ、「二百文はあまり高かるべし、百五十文にせん。」といふ。それより百五十文にて六七十賣り、終には先見明かなるその妻の言の如く、「二百文よりまかりませぬ。」と、肩を怒らして賣り、まだ五つ半にもならぬに賣れ切れたり。

寢惚様 蜀山人自ら寢惚先生と戲號した。女の智慧の慾が先なり。

「二百文よりまかりませぬ」  
\*肩を怒らす  
五つ半 今の午前・午後の九時頃をいふ。こゝては午前九時頃。

錢二十貫ほど、金にして三兩ばかりになりしゆゑ、夫婦はこけつ轉びつ翁の宅に來り、亭主をかきのけて女房まかり出で、「有難い。」を數千遍述べて、「いかにも先生は生神様なり。」と今度は神あしらひにしつゝ、悦び歸りきとぞ。木翁が醉餘の戲、よく枯骨に膏すといふべし。

「亭主をかきのけて女房まかり出で」  
「醉餘の戲、よく枯骨に膏す」

時鳥なきつるあとにあきれたる後徳大寺の  
ありあけの顔

一つとり二つとりては焼いてくふ鶉なくな  
る深草の里

蜀山人の奥

(蜀山人)

### 一六 入江の奥

若山 牧水

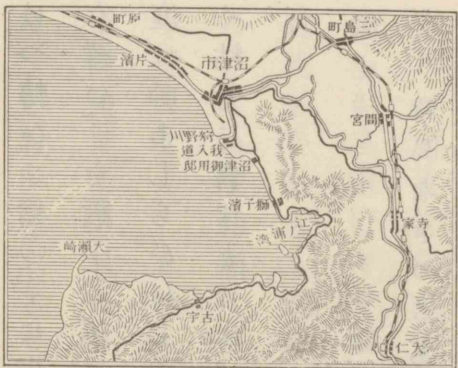
若山牧水 名は繁。歌人。昭和三年歿、年四十五。

大瀬崎 静岡縣田方郡

狩野川 静岡縣駿東郡

「まるで山陰の池のやうな」

伊豆の大瀬崎と駿河の狩野川の川口との狭い間に、二三里も深く入込んだ入江の奥は、まるで山陰の池のやうな静けさと、さうして物凄しい程の深さとをもつて湛へて居る。そのあたり入江を挟んだ山はみな断崖で、現にその崖をも切削いで建築用の石材を採つてゐるので、樹木などもあまりなく、何となく寒げな姿をしてゐるけれども、その崖の根の水は全く深く澄んで、これが沖に連なつて、大きな浪や、うねりを上げてゐる。



大瀬崎附近

のかと思ふと、不思議な氣がする位である。

或日の夕暮、私はふと氣まぐれに思ひ立つて、その入江の奥をせか／＼と歩いてゐた。三時頃に家を出て、三里近い道をそこまで歩いて行つたのである。漁師町とも舟着場ともつかぬ五六十軒の家のかたまつた宿場が、その附近の崖の根に散在してゐる。ことにずつと奥になると、道は屈折の烈しい磯の崎を迂回することをせず、宿場から宿場へ、崎の根方に隧道を穿つて通じて居る。がらん洞な一つを通り抜けると、恰も其處へ上から切出した石を落されたり、大きな聲でどなられたりして、ぼんやりした心を驚かしながら、いつの間にか、よく／＼の奥のつまりまで、私は歩いて行つたのだ。丁度その道下の狭い濱で小さな地引網を引いてゐた。

「その入江の奥をせか／＼と歩いてゐた」

\* 迂回

「よく／＼の奥のつまりまで、私は歩いて行つたのだ」  
「その道下の狭い濱で小さな地引網を引いてゐた」  
\* 地引網

私は道ばたの石に腰かけて、十人ほどの人の引いてゐるその網をじいつと眺めてゐた。もう上りに近い頃で、程なく私はそれが白子網であることを知つたが、いよ／＼その上らうとする時であつた、中の一人が、何やら頓狂な聲を出した。すると十人ほどのすべてが、それに合はせて手足を振り動かすやうな大きな叫び聲をあげた。その聲を聞きつけると、つい近くの部落から四五人の男女が駆けだして来て、其處に集つた。そして道から飛降りて、惶てて地引の仲間に加はる者もゐた。網尻について舟を浮かべてゐた二人の男は、その網の上り終るのを待ちかねて、網の中から二すくひ三すくひの白子を掬ひ取るや否や、自分の舟の中に打ちあけて、あたふたと沖の方に漕出して行つた。網につかまつてゐた者の中からも、二三

白子 長さ三程許り、白くて黒みがあり、どちやうに似て、乾してシラスホシにする。  
\*頓狂

\*矢庭に

人の男が矢庭に、其處の砂地に上げてあつた他の小舟を押下して、同じく地引網の中から白子を掬つて漕出した。その間に引手は無上やたらに急いで、地引を引上げたが、中にはかなりの白子が入つてゐた。けれど彼等は、それには殆ど眼もくれないさまで、たゞ一刻も早く引上げた網を整理しようとおせらしかつた。しかし、なか／＼それが思ふやうに行かなかつた。見物人は増し、彼等の叫び罵る聲は一層高まつた。



地 引 網

沖に漕出した舟は、いま掬つて行つた白子を頻りに海に撒いた。

「見物人は増し、彼等の叫び罵る聲は一層高まつた」

てゐた。見ると、その舟のぐるりに大きな渦の面のやうに、また夕立雨のふり注ぐやうに、無数の波紋がかすかな音をも立てかねまじき有様で、一面に卷起つてゐるのである。それを見て私には彼等の叫び聲の意味が漸く解つた。白子を追うて来た何か他の大きな魚の群が、彼等の網のあとからいま其處に寄つて来たのである。白子はさて置き、まづその大きな魚族を逃すまいと、彼等漁師は勢ひこんであるのであつた。白子を撒くのは其處に寄つた魚族を逃すまいための罠であるのだ。

「何です。」

私は側に來て立つてゐる土地の者らしい若い女に訊いた。「うづわですよ。」

「かすかな音をも立てかねまじき有様」

\* 罠

うづわ 渦輪罠の略。腹に條がなく、背

「あゝ、うづわですか。」

うづわとは普通いふ鱈のことである。

舟では、一人の男が有合はせの釣道具に白子をさして釣り始めた。鯊釣に使ふやうな小さい竿が二重に曲るやうに撓んで、見る／＼二尾三尾と大きなうづわが釣りあげられた。

そのうちに他の一艘は網の用意が出来たと見るや、くると漕返つて濡れしとつた網を山のやうに積み載せると共に、どやどやと四五人の新しい漕手を乗せて、狂ほしげに漕出して行つた。一艘の方では、一人がせつせと白子を撒き、一人が頻りに釣つてゐるのである。それを中心にとり圍んで小さな圓を描きながら、網舟はえつさ／＼と漕いで廻つた。

冬の夕暮のうすら明かりは、いつの間にか青やかな月の夜

から尾まで渦の斑文あるもの。まぐろの一種。

「舟では……白子をさして釣り始めた」  
鯊 體細長く圓く、口ひろく鰓大きく、背部は褐色で淡黒色の斑點がある。

「それを中心に……網舟はえつさ／＼と漕いで廻つた」

「いつの間にか青やかな月の夜となつ

となつてゐた。其處から見る入江の向うの山陰は、墨繪のやうに深い影を作り、私等の立つてゐるあたりは、まともに満月らしい光を受けてゐた。其處へ程なくその死物狂ひの網は引きあげられた。狂ほしい人影と叫び聲との中に打ちあげられた網の中のうづわは、素人目にも二百近い数がよまれた。網の者も見物人も、みんな全く酔つたやうな心持で暫くこれを眺めてゐた。

(静かなる旅を行きつゝ)

てゐた

\*まとも

\*素人目

\*よまれた

「みんな全く酔つたやうな心持で暫くこれを眺めてゐた」

足もとにさわげる浪は満潮のゆたけき音をたゝへたるかな

(若山牧水)

### 二七 展望車と機關車

東郷 實

九州地方の遊説を終へての歸るさ、上り特急の展望車最後の安樂椅子に凭れながら、靜かに外を眺めて見た。無論汽車の進行とは反對の方向に自分の顔は向いてゐる。自分達の乗つて來たレールを中心に、様々の風景が心持よく、次から次に展開されて來る。恰度活動寫眞を觀てゐるやうな氣持だ。併し、時々刻々變つて行くこの美しい風景も、所詮は自分の乗つて來たレールを中心としての範圍に限られてゐる。このレールを離れてはそこに何物をも見出し得ない。而もその風景の總べては自分が通過して來た後のものばかりであつて、之から行かんとする前面の風光とは何等の

東郷 實 ベルリン大學出身。農學博士。政治家。明治十四年生。「展望車」

交渉もない。竝行した二本のレールが段々先細りになる、それに連れて兩側の風景が同じく先細りになつて見える。而もそれが廳ては視線から遠ざかつて見えなくなる。

自分は考へた。自分がかうして展望車の中から、自分の通つて來た後の風景を眺めながら楽しんでゐるのは、恰も功成り名遂げた老人が安樂椅子に埋りながら、靜かに過去を追懷して、獨り悦に入つてゐるのと同様だ。過去の追憶、それは斷じて將來に生くべき青年の爲すべきことではない。過去を物語り、過去を自慢する様になると人間も既に下り坂だ。獨り人間ばかりでない、國家亦然りである。一時天下の覇權を握つてゐた、西班牙、葡萄牙も、今や三流四流の小弱國に成り下つた。彼等の誇とするところは、僅かに過去の歴史である。

\*過去の追懷

西班牙 西紀一四七九年建國、王國なりしも西紀一九〇一年の革命に共和

政體となる。  
葡萄牙 十二世紀以來王國なりしも西紀一九一〇年の革命後は共和政體。

その歴史を物語る幾多の銅像や記念碑、それが彼等國民を慰むる唯一の寶物である。展望車の安樂椅子に腰を落しながら、自分達の通つて來た後の風光に見取れてゐるのが、彼等西班牙人であり、葡萄牙人である。

かう考へた時、自分はこの身が青年であることに氣が付いた。安閑として展望車の安樂椅子に過來し方の風光を眺め暮すべき身でないことに氣が付いた。自分は老人ではないぞ、自分は働くべき青年なんだ。かう氣が付いたとき、自分はこの列車の先頭に立つて働く機關車のことを思ひ出さずにはゐられなかつた。總べての原動力となつて、この列車を自由に動かしてゐる機關車、そこには晝夜を分かつた、自己の貴い使命に生きんとする健氣な機關手が乗込んでゐる。絶え

「働くべき青年」

「機關車」

ずシヨウベルを動かして、原動力の調節に餘念なき彼等、そこにはこの列車の進退を自ら支配せりと云ふ誇以外、他に顧みるべき何物をも有しない。

男らしい任務、青年らしい使命、それは機關車に乗るべきものの任務であり、使命である。「大日本帝國」と名付けた特急列車は、今や斯くの如き青年の奮起を熱望してゐる。吾々は展望車の安樂椅子に過去を夢みるが如き享樂主義の國民を絶對に排撃する。吾々は過去に生きずして、將來に生きねばならぬ、吾々國民の總べてが、斯くの如き青年の意氣に醒め、展望車を棄てて、機關車に走り赴く時、そこに初めて我が帝國が世界無比の最大特急列車たり得べき機運が到來するであらう。

(三等に乗りて)

シヨウベル Shovel.  
土砂をすくふに用ふる具。  
「原動力の調節」

「展望車を棄てて機關車に走り赴く」  
「世界無比の最大特急列車」

## 一八 母へ

野上彌生子

お母様、豫ての計畫通り、私たちは此の夏の一月をこの湖畔で過すために参りました。今日で丁度十日目になります。この湖の美しさ、ことに富士山を背景に持った高貴さ。朝と晝と夕方と夜と、時々、依つてその魅力を變へて行く夢幻的な姿は、當分の間たゞ私たちを恍惚<sup>うろたへ</sup>させたきりでした。けれどもこの頃では私たちも、いつとなしにこの湖に馴れて來ました。私たちはもう初ほど夢中にならないで、靜かにこの景色を楽しめる心持になりました。東京の家の書齋の窓から庭の植込を眺めると、同じ落着き、同じ靜かな悦びで、目の前の湖を眺め、周囲の山々を見渡し、富士の根を仰ぎ、その裾に

野上彌生子 女流作家。野上豊一郎夫人。明治十八年生。

湖畔 精進湖々畔のこと。精進湖は山梨縣西八代郡の東富士山の西麓に在る。富士五湖の一。

\*魅力  
「時々によつて魅力を變へて行く夢幻的な姿」



廣く横たはつてゐる青木ヶ原の森林を望むことが出来るやうになりました。これで私たちは、一夜泊りの探勝者のあわただしい驚きと歎美から轉じて、氣永くこの湖との交りを樂しむ友達になり得たのだと思ひます。實際、私たちの借りてゐる山の小家の軒下に立つて、じつと湖を見下してゐますと、私たちが十日前までは、あの忙しなく目まぐるしい東京に住んでゐたとは到底思はれません。もう幾年間も、この山でこの湖を眺めて暮して來たやうな氣がいたします。

家の様子を少し申し上げませう。

一體この精進湖は、富士山の周りにある多くの湖水の中でも、一番曲折に富んだ形を持つて、丁度一枚の無花果の葉を擴げたやうな恰好をしてゐます。三里に足らぬ周圍の間に、七



ルテホ進精と湖進精

つの岬と、その數に伴なふだけの入江があり、東南に開けた青木ヶ原の森林は、弓形に湖面まで伸び出て、それがその儘裾野に連なつて、其の上に富士が眞直ぐに聳えてゐるといふ順序です。その富士と青木ヶ原を右手に取つて、西の方から一番最初にかつ一番長く湖の中に突出てゐる岬が、ホテルの在る岬であります。そして私たちの借りてゐる家は、その岬と次の第二の小さい岬との間に作られてゐる入江を控へた高臺に、砂地の畑を前にして立つてゐます。村の人達は此處を明神澤と呼んでゐます。濱と云はな

青木ヶ原 富士山麓

山梨縣側にある大森林地帯。一望樹木の海の如しといふので「樹海」の名がある。周圍約十六軒。

\*探勝者 「あわただしい驚きと歎美から轉じて」

\*忙しなく 目まぐるしい

\*無花果の葉を擴げたやうな恰好 無花果 クワ科に屬する小アジャ原産

の落葉樹。高さ三米に達し、葉は互生し大形で、全葉或は二三裂し縁は鋸齒をなす。我が國に渡來せるは寛永年間のことといふ。

いで澤と云ふのは、この上に谷川があるからだらうと思ひます。激しい降雨の後には、川は湖水まで走り下るのださうで、川床は濱邊まで續いてゐます。けれどもその家は、本來は住宅ではなく、鱒の養殖所として建てられたもので、見掛けの大きい割に、部屋は番人の居場所となつてゐた八疊一間きりなのです。そして残りの部分は悉く土間になつて、今は中止してゐる養魚上の様々な道具が、一杯に積重ねたり立てかけたりしてあります。天井は張つてありません。そして普通の壁のある場所には、表から張りつけた南京葎が、その儘一枚一枚顔を並べてをり、内側からはまた、それ等の板を押へつけて排列を亂させまいとするかのやうに、三寸角の木材が隅から隅へと、十文字に足を踏みはだけてのさ張つてゐる光景は、

「激しい降雨の後には……續いてゐます」

南京葎 支那風の葎。「葎」は日覆、又は風雨を防ぐための戸。

\* 踏みはだけのさ張る

最初みんなの肝をひやしたやうに見受けました。

「みんなの肝をひやす」

\* 今一つの家

私たちには今一つの家があつて、この一間で出来ないやうな讀書とか書き物とかは、みな其處ですることにしてゐます。その家は養魚所の後から、雑草と桑畑の間に通じてゐる小路を辿つて、一町餘り爪先上りに上つた山の登り口に立つてゐます。二間に二間半と云ふ建物ですから、下から眺めると、後にまつ黒い山を負ひ、周圍に高い木立を群らして、おもちゃの家を一つ置いたやうに、小さく可愛らしく見えます。この家はホテルの先代が自分の隠居所に建てたのださうで、外觀はすつかり洋風に出来上つてゐます。正面の長い引きおろし窓には、鎧戸まで附いてゐます。昔は多分部屋の内側も板張りで、ベッドでも置いてあつたのでせうが、今は四疊半にだ

「おもちゃの家」

鎧戸 空氣の流通するやうに、板を斜に幾枚もとりつけた戸。

け疊が敷いてあつて、あとの二疊は板の間になつて、その隅には二尺四方の爐が切つてあります。そして四疊半の方には上下になつた一間の押入と、その横に小さい、それでも腰かけるやうになつた洋風の便所がついてゐます。此の通りに、小さいながらも家としての設備は不足なく整つてゐるのです。が、たゞひどく年数がたつて、何年も住む人がなかつたと見えて、天井もなくなれば、羽目板もむき出しになつてをり、押入の戸もなければ、四疊半と板の間との間のしきりもないといふ始末になつてゐました。が、私たちはすべてを承知で、それでも悦んで、その家を借りたのでした。それ位私たちは、その小さい廢屋の位置と周圍とに引きつけられたのでした。そして私たちは養魚所を下の家と呼び、山の家を上の家と呼んで

ベッド Bed. 寢臺。

\* 羽目板

ゐます。この上の家の窓から見た景色はなか／＼見事なもので、簡単なスケッチをお目にかけますと、窓の前は一寸した草地になつて、其處には八本の若い杉が並び立ち、湖はその杉本立の間にいつでも碧い水を湛へてをり、杉本立からはみ出した左右の部分は、右はホテルの岬から、遠く青木ヶ原の樹、又は海まで續き、左は第二の岬の森が芝地の傾斜になり、最後には赤褐色の石ころの岸になつた處で限られてゐるといふ構圖になつてゐます。湖の向う側の縁は約二千尺の密林でまっ青になつた二つの山です。朝日はその左側の方の山の肩から出ます。太陽がやがて昇らうとしてまだ現れず、先驅の光線が空の雲と湖とを眞赤に燃やす時の輝かしい美しさは、地上のものではないやうな氣がいたします。それは大抵四時

スケッチ Sketch.  
寫生文・小品文の  
意。

「構圖になつてゐます」

\* 先驅

半です。—そして私はその頃にはもう起きて、その小窓の下に鏡を立てて髪を結び、その小窓の外側の笥で、口を漱いだり顔を洗つたりしながら、うつとりしてその景色に見とれます。さう／＼お母様、その笥の水の事も私は書洩らしてはならなかつたのでした。それは上の家の後に流れてゐる谷川から、窓の前の草地に拵へた小さい池に引入れてある水で、明神澤の清水と云へば、この邊でも名高い、旨しい水なのださうでございませう。冷たいことは勿論です。尙嬉しいことは、湖水までは届かずに土中に浸込んで仕舞ふ位の谷川の流も、この邊ではまだ中々水量が豊富で、絶えず涼しい瀬の音を響かせながら、大きな岩組の間を流れてゐることです。初めの四五日は承知してをりながらも、それでも毎朝のやうにだまされま

「湖水までは届かずに土中に浸込んで仕舞ふ位の谷川の流」

\* 岩組

した。

「おや、雨が降つてるのか知ら。」

かう思つて、耳を澄まして、次の瞬間にそれと氣がついた時には何より樂しうございました。實際、目前の湖水の眺がどれ位美しくとも、この谷川とその水聲と、そしてそれから別れ落ちる笥の清水がなかつたならば、この小さい家の魅力はずつと殺がれることと思ひます。それ位この谷川はこの家とびつたりしてをります。私は讀むことにも書くことにも疲れると、よくぼかんとしてこの水聲に耳をすまします。川は家の後を流れてゐるばかりでなく、私の身體のうちにも流れ込み、流れ抜けてゐるやうな氣がいたします。

「小さい家の魅力はずつと殺がれる」

お母様、此處まで書いて氣がつくと、私は假住居の家のこと

ばかりに心を奪はれて、この湖の大事な富士山の美に對しては餘り冷淡であつた様に思はれはしないかを恐れます。決してそんな處ではないのですから。私は湖は朝から晩まで終日見ない日はなくとも、富士は見ない日が多うございます。私の家からは、上の家からでも、下の家からでも、富士は見る事は出来ませんから、村の人たちはそれをこの明神澤の唯一の缺點として數へるやうです。けれども私は目をあければ、いやでもその姿が臉の裏に落ちて來る氣易さよりも、それを見るために家を離れて二三丁も足を運ぶとか、湖の中まで船を漕出すとかする手数を、却つて楽しいものに思つてをります。またそれがあつて富士の高貴さが珍しく、特別の勿體なさが味は、れるやうな氣がいたします。實際私たちは朝

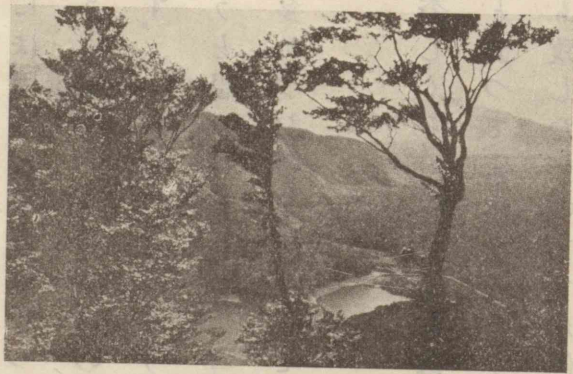
\*處

「富士は見ない日が多うございます」

\*紺青

「わざ／＼見に出かけます」

湖にうつる美しい雲を見たり、夕方紺青に暮れ行く透明な空をあふいだりする時に、富士の美しさを想像してわざ／＼見に出掛けます。右に行けばホテルの後の本栖道から見事な富士が見られ、左の方では、上の家の横から山道傳ひに精進村の方へ一二丁辿つて行つたところで、すばらしい富士が見られます。けれども本當の富士の美しさと莊嚴とを見るためには、上の家の前の小道を後の山へ千尺ほど登つた見晴しへ行かなければならないさうでございます。其處では、富士が河口湖・西湖



見晴よし精進湖を望む

河口湖・西湖 山梨

精進湖本栖湖の四つの湖をその裾に輝かしながら、見上げるばかり高く真直ぐに聳え、反對の空には、甲州白根御嶽につゞく日本アルプスの一帯が屏風のやうに連なつて、神仙境のやうな美しさを展開してゐるさうです。いづれ一二日のうちには、私たちもその山へ登つて見ようと思つてゐます。今日もよつ程思ひ立つたのですが、雲が多かつたので見合はせませんでした。

いづれその上で、また出来るだけ委しくその模様をお母様に書いて御送り致しませう。風穴と云つて、青木ヶ原の中にある氷の洞窟に入つた珍しいお話も致したいのですが、餘り長くなりすから、それも此の次に一緒に書きませう。では左様なら。御機嫌でいらつしやいませ。(週刊朝日)

縣南都留郡。精進湖・本栖湖。山梨縣西八代郡。白根・御嶽。山梨縣中巨摩郡。神仙境。仙人の住む地。うるさい世間を離れた静かな土地。日本アルプス。この名稱は明治十二三年頃初めてこの山岳地帯を探検した歐人ウイリアム・ガウランドの提唱による。飛騨山脈の連峯を北、木曾連峯を中央、赤石連峯を南アルプスと通稱される。

一九 華

一

かの巧みなる職人の、  
華をつみ集むるごとく、  
善く説かれたる法句を、  
つみ集むるものは誰ぞ。

二

花びらと色と香を、  
そこなはず、  
たゞ蜜味のみたづさへて、  
かの蜂の飛去るがごと、

\* 法句  
「つみ集むるもの」

人々の住む村々に、  
かく牟尼尊は歩めかし。

三

まこと、いろうるはしく、  
あでやかに咲く花に、

香なきが如く、

善く説かれたる語も、

身に行はざれば、

その果實なかるべし。

四

まこと、

色うるはしく咲ける華に、

「かく牟尼尊は歩め  
かし」

「果實なかるべし」

香りの伴なふがごと、

善く説かれたる語は、

これを身に行ふとき、

はじめてその果實はあらん。

五

うづたかき華堆より、

かすくの華の鬘を、

作りえん。

かくのごとく、

こゝに生まれたるもの、

こゝに死すべきものの、

なしとげうべき、

善きことは多し。

「果實はあらん」

「善きことは多し」  
友松圓諦 慶應義塾  
大學・大正大學教  
授。明治廿八年生。

(法句經 友松圓諦譯)

### 二〇 陶磁器の美

柳 宗 悦

柳 宗悦 同志社大  
學教授。明治二十  
二年生。

諸君は特に東洋での日々の生活の友であつた陶磁器につ  
いて、嘗て何事か考へたことがあるだらうか。

それ等のものが吾々の周圍に餘りに多い爲に、却つて多く  
の者はそれを顧みる心を忘れてゐる様である。然も近代に  
於てその技巧や、美が著しく沈んだ爲に、人は深い感興をそこ  
に起す機を失つてゐるかも知れぬ。之に反して或人はかゝ  
るものを愛するのを弄ぶ遊戯に過ぎないといつて、その心を  
卑しむ様にさへ見える。

然しさうでない。盡きない美がいつもそれ等の器の中に  
厚く包まれてゐる。かゝる不注意や、かゝるものの見方は、寧

「弄ぶ遊戯」



鉢 と 壺

ろ人々の心が現代に於て味なく荒んできたことを告げるの  
ではあるまいか。人々はそれ等  
のものが、嘗ては日々の親しい友  
であつた事を忘れてはならぬ。  
それをたゞの器だといひ過ぎて  
はいけない。日毎々々に人々は  
それ等のものと共に煩ひの時を  
過してゐる。人々の煩ひを柔げ  
ようとして、凡ての器はよき形を  
と擇んでゐる。よき色を、よき模  
様をと示してゐる。陶工は嘗て  
それ等のものに美を包む事を忘れたのであつたのである。それ

\*荒んできた



は人々の周囲を飾り、眼を慰め、心を温めようとて作られたのである。吾々の日々の生活が如何にそれらのものの匿れた美によつて、知らず識らず温められてゐるかを知らなければならぬ。今の人々は喧しい蕪雜な此の世の生活のうちに、それ等のものを顧みる餘裕を有しないかしら。私はかゝる餘裕を貴い時間の一部であるといつても考へてゐる。かゝる餘裕を富の力に歸してはいけぬ。眞の餘裕は心が産むのである。富は美の心までを作りはしない。美の心こそ吾々の生活を豊かにするのである。

若しも吾々にさへ潤つた心があるなら、吾々はこの慎ましい窯藝の世界に於て、匿れた心の友を見出す事が出来る。それを只趣味の世界であるといひ去つてはならぬ。そこにも

「周囲を飾り、眼を慰め、心を温めようとて作られた」

\* 蕪雜

\* 餘裕

\* 窯藝  
「匿れた心の友」

豫知し得ない神祕があり、驚嘆がある。そこに一度親しむなら、吾々はそれらの美を通して、民族の心情や、時代の文化や、自然の背景や、又人間そのものの美に對する關係をさへ味はふ事が出来る。それを弄ぶ趣味に止めるものは、見る者の心の卑しさによるのである。若しその内に近づくなら、それは屢々吾々を深い世界に迄導いてくれる。美しさは又深さではないか。私は私の宗教的思想が實際それ等のものによつて、永い間育まれ、温められて來た事を感じないわけにはゆかぬ。私は私の傍に集めた幾つかの作品に對しても、私の感謝の情を黙してゐてはならないと思ふ。

わけても陶磁器の美は「親しさ」の美であると私は思ふ。私達はそれ等の器に於て、靜かな親しげな友を、いつも側近く持

\* 宗教的思想

\* 黙す

つことが出来る。それは殆ど私達の心を亂すことなく、いつも室内に私達を迎へてくれる。人は彼の好むまゝに彼の器を擇べばいゝ。器も亦常に私達の好む場所に置かれる事を待つてゐる。それは全く人々の眼に觸れようとして作られたのではないか。靜かに黙するそれ等の器も、必ず彼等にふさはしい心情を内に包んでゐる。私はそれ等のものが愛の性質を持つてゐることを疑ふわけにゆかぬ。それは美しい姿を持つてゐるではないか。然もその美しさは心の美しさが産んだのではないか。彼等を愛する者は、必ずや二つの手の間にそれを抱上げる。私達がかくしてそれに眼を注ぐ時、温かい吾々の手を、それらのものも慕つてゐる様に見える。人の手は器にとつては、きつと母の温味があるに違ひない。

「彼等にふさはしい  
心情を内に包む」

「母の温味がある」

愛し得ない陶磁器がどこにあらう、愛し得ないなら、それが冷やかな手で造られたか、又は冷やかな眼で見られるが故であらう。

私は彼等に愛の性質を感じるにつれて、如何に陶工が愛を以てそれを産み造つたかを想はないわけにはゆかぬ。陶工が一つの壺を彼の前に置いて、餘念なく彼の心をその内に注いでゐる光景を、私はよく想像する。試みに想へよ。例へば一つの壺が作られつゝあるその瞬間を。此の世に於て、壺と彼とたゞ二人ぎりである。否、製作に餘念ない其の時、壺は彼に生き、彼は壺に生きる。愛が二人の間を通つてゐる。一つに流れるその情愛のうちに、實に美は生まれるのである。讀者は嘗て陶工の傳記を讀んだことがあるだらうか。眞に美

に奉仕する一生の實例を屢、そこに讀む事が出来る。試練に  
 試練を重ね、幾度か失望し、幾度か勇氣を起し、家庭を忘れ、私財  
 を盡くし、眞に仕事に一身を没入した彼等を、私は忘れる事が  
 出来ない。燒きに燒いて、燒き至らず、既に薪を得る資も盡き  
 て、彼自らの家のみが薪として残る時を、讀者は思ひ至つた事  
 があるだらうか。實際自らを忘れるかゝる異常な出來事に  
 よつて、此の世の優れた作品は得られたのである。吾々はそ  
 れ等の作品に包まれた熱情を冷やかに見過してはならぬ。  
 愛なくしてどうして美が生まれてこよう。陶磁器の美もか  
 かる美の現れである。器は實際に用ひられるが爲の器であ  
 る。しかし功利の念のみがそれを作り得ると思ふのは誤で  
 ある。眞によき器とは同時に美しき器との意であらねばな

\* 試練

\* 没入

「自らの家のみが薪として残る」

\* 功利

らぬ。功利の世を超えて、愛が陶工の胸に満ちる時に、彼は優  
 れた作を産むのである。眞に美しい作は作る事それ自らを  
 楽しんだ時に生まれるのである。器が只功利の爲に作られ  
 る時、それは醜さに陥るのである。作者の心が淨まる時、器も  
 心の美しさを受けるのである。凡てを忘れる刹那が美の至  
 る刹那である。近世窯藝の恐しい醜さは、功利の心が産んだ  
 物質的結果である。陶磁器を只の器だと思つてはいけない。  
 器といふよりは寧ろ心である。それも愛の籠る心である。  
 親しさの心である。その美は親しさの美であると私は思ふ。  
 それ等の美が如何にして生まれるかといふことに就いても、  
 深く省みる處がなければならぬ。

(現代三十三人集)

### 二 森の繪

吉村 冬彦

暖かい縁に背を圓くして横になる。小枝の先に散残つた枯れぐの紅葉が目に見えぬ風にふるへ、時に蠅のやうな小さい蟲が、小春の日光を浴びて、垣根の日陰を斜に閃かす。眩しくなつた眼を室内へ移して鴨居を見ると、こゝにも初冬の「森の繪」の額が薄ら寒く懸つて居る。

中景の右の方は檜か何かの森で、灰色をした逞しい大きな幹はすく／＼と立ちならんで、次第に暗い奥の方へ續く。隙間もない茂りの緑は霜に稍さびて、得も云はぬ色彩が梢から梢へと柔かに移り變つて居る。コバルトの空には玉子色の綿雲が流れて、遠景の廣野の果ての丘陵に紫の影を落す。森

吉村冬彦 本名は寺田寅彦。理學博士。東京帝國大學理學部教授。昭和十年歿、年五十八。

\*小春

「こゝにも初冬の『森の繪』の額が薄ら寒く懸つて居る」

コバルト Cobalt. 淡い群青色。空色。

のはづれから近景へかけて、石ころの多い小徑がうねつてゐる處を、橙色の服を着た豆大の人が長い棒を杖にし、前に五六



森の繪の額

頭の牛羊を追うてとぼ／＼出て來る。近景には低い灌木が所々茂つて、中には箒のやうな枝に枯葉が僅かにくつつ付いて居るものもある。あちらこちらに伐倒された大木の下から、眞青な羊齒の鋸葉が覗いて居る。

寧ろ平凡な畫題で、作者もわからぬが、自分は此の繪を見る度に、靜かな田舎の空氣が畫面から流れ出て、森の香は薫り、鴨の叫

「とぼ／＼出て來る」

「眞青な羊齒」

びを聞くやうな氣がする。その外にまだなんだか胸に響くやうな鋭い喜びと悲しみの念が湧いて来る。

「胸に響くやうな鋭い喜びと悲しみの念が湧く」

廿年前の我が家のすぐ隣は叔父の屋敷、從兄の信さんの宅であつた。裏畑の竹藪の中の小徑から、我が家と往來が出来て、垣の向うから熟柿が覗けば、こちらから烏瓜が笑ふ。藪の中に一本大きな赤椿があつて、鴨の渡る頃は、落ち散る花を笹の枝に貫いて、戦遊びの陣屋を飾つた。木の空にはごを仕掛けて鴨を捕つた事もある。

はご 鶺鴒。蘆・竹・繩等に繒(モチ)をつけ罫を置いて鳥を捕るもの。

叔父の家は富んでゐて、奥座敷などは甘疊もあつたらう。美しい毛氈がいつでも敷いてあつて、欄間に木彫の龍の眼が光つて居た。

\* 欄間

いつか信さんの部屋へ遊びに行つた時、見馴れぬ繪の額が

かゝつて居た。何だと聞いたら、油畫だと云つた。其の頃田

\* 石版刷

\* 臨畫帖

舎では石版刷の油畫は珍しかつたので、西洋畫と云へば學校の臨畫帖より外には見たことのない眼に、始めて此の油畫を見た時の愉快な感じは忘れられぬ。畫は矢張り田舎の風景で、ゆるやかな流の岸に水車小屋があつて、柳のやうな木の下に白い頭巾をかぶつた女が、家鴨に餌でもやつて居る。何處で買つたかと聞いたたら、町の新店に、こんな繪や、もつと大きな美しいのが澤山に來て居る。ナポレオンの戦争の繪があつて、それも欲しかつたと云ふ。

ナポレオン

Bonaparte

Napoleon.

(1769—1821).

ナポレオン一世。

「繪の事が心を離れ」

家へ歸つて、夕飯の膳についても、繪の事が心を離れぬ。黄昏に袖なしを羽織つて、母上と裏の垣で寒竹筍を抜きながら、繪の事を思つて居た。薄暗いランプの光で寒竹の皮をむ

きながら、美しい繪を思ひ浮かべて、淋しい母の横顔を見て居たら、急に心細いやうな氣が胸に吹入つて、睫毛に涙がにじんだ。何故泣くかと母に聞かれてなほ悲しかった。そんなに欲しければ買つて上げる。男の癖にそんな事ではと諭されて、更にしやくり上げた。母は蟲抑への藥を取出して吞ませてくれたが、あの時の自分の心は、今でも説明が出来ぬ。幼くて片親の手一つに育つて、餘り豊かでない生活が朧げに胸にしみ、浮世の木枯はもう周圍に迫つて居たから、何かの刺戟はすぐに譯のわからぬ悲しみを誘うたのだ。

あくる日、錢を貰うて先づ學校へ行つたが、教場でも時々繪の事に心を奪はれ、先生に何か聞かれても、何を聞かれたか分からぬやうな事もあつた。放課のベルを待ちかねて學校を飛

「急に心細いやうな氣が胸に吹入つて、睫毛に涙がにじんだ」

「浮世の木枯はもう周圍に迫つて居た」

びだし、信さんに教はつた新店を尋ねたら、すぐにわかつた。

店へ這入ると、一面に吊した繪のニスニスの香に酔うてしまふ。あれも好い。これも氣に入つた。鍛冶屋の煙突から吹出る眞赤な焰が黒い樹に映えて、遠い森の上に青い月が出て居る繪も欲しかつたが、何となく靜かな此の「森の繪」にきめた。粗末な額縁をはめて貰つて、其の上を大事に新聞で包んで店を出た時は、心臓が高い音を立てて踊つて居た。

歸り途に舊城の後を通つた。御城の杉の梢は丁度此の繪と同じ様なさびた色をして、お濠の石崖の上には葉をふるうた椋の大木が、枯菰の中のつめたい水に影を落して居る。濠に隣つた牧牛舎の柵の中には、親牛と小牛が四五頭、愉快さうにからだを横にゆすつては寝て居る。自分もなんだか嬉し

ニス ニス。

(Varnish) 樹脂を酒精、乾性油、てれびん油等にとかしたものだ。

「心臓が高い音を立  
てた」

枯菰 枯れた眞菰。

くなつて、口笛をピュック〜と鳴らしながら飛ぶやうにして歸つた。

「森の繪が引出す記憶には限りがない。豎一尺横一尺五寸の粗末な額縁の中に、あらゆる幼時の美しい幻が疊み込まれて居て、折にふれては畫面に浮出る。現世の故郷はうつり變つても、畫の中に寫る二十年の昔は、さながらに美しい。外の記憶がうすれて來るほど、森の繪の記憶は鮮かになつて來る。他郷に漂浪しても、此の繪だけは捨てずに持つて來た。額縁も古ぼけ、紙も大分煤けたやうだが、「森の繪はいつでも新しい。」  
(藪柑子集)

「口笛をピュック〜と鳴らしながら」

「畫面に浮出る」

「森の繪」はいつでも新しい。」

### 三 箱根路

正岡子規

箱根路にかゝれば、なんとなく行脚の心の中嬉しく、秋の短き日は全く暮れながら、谷川の音耳を洗うて、煙霧模糊の間に白雲光あり。

湯元に辿り着けば、一人のをのこ袖を控へて、よき宿まゐらせんといふ。引かるゝまゝに行けば、むさくろしき家なり。前日來の病も未だ全くは癒えぬに、この旅館に一夜の寒氣を受けんこと氣遣はしく、やゝ落膽したるが、これこそ風流の本意、行脚の眞面目なれと、そのまゝこゝに宿りぬ。

次の日まだき起きいでつ。板屋根の上の滴るばかりに霑ひたるは、昨夜の雲のやどりにやあらん。夜もすがら雨と聞

正岡子規 名は常規。俳人。明治三十五年歿、年三十六。

\* 煙霧模糊

湯元 神奈川県足柄下郡湯本町。箱根七湯の一。

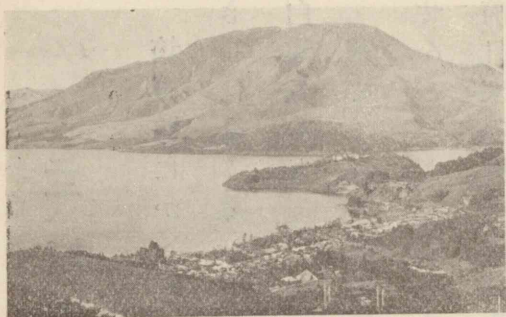
「風流の本意」

\* 霑ふ

きは、寛の音、谷川の響なりしものと、はや山深き心地ぞすなる。

今日は一天晴渡りて、瀧の水朝日に閃くに、鵜鴿の小岩傳ひに飛歩くは、逃ぐるにやあらん、此方へとしるべするにやあら

んと、草鞋の運びおのづから軽らかに、箱根街道登り行けば、鴨の聲左右にかしまし。

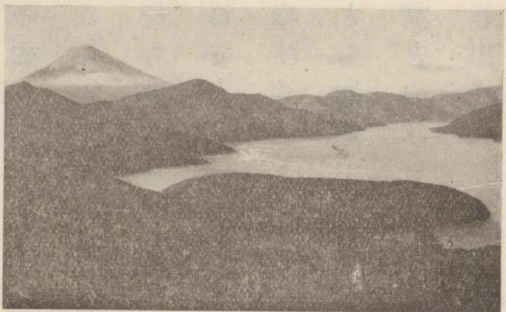


(一其) 湖の蘆

病み疲れたる身の、一足登りては一息ほつとつき、一坂登りては巖端に休む。駕籠舁の頻りに駕籠を勧むるを耳にもかけず行けば、はや二子山鼻先に近し。谷に臨める形ばかりの茶屋

「しるべするにやあらん」

「駕籠を勧むるを耳にもかけず」  
二子山 箱根中央火山の東南端。



(二其) 湖の蘆

に腰掛けて打見やれば、千仞の谷間より木を負うて登り来る樵夫二人、ものも得いはで汗を滴らすさまいとあはれなり。樵夫も馬子も皆足をこの茶屋に休むれば、それぐにいたはる老婆のなさけ、一碗の澁茶よりもなほ濃し。「名物ありや。」と問へば、「力餅といふものなり。」とて、大きな餅の焼きたるを二つ三つ盆に盛り来る。力餅の力を藉りて登ること一里あまり、杉樫の大道を挟み、元箱根の一村、目の下に見えて、秋さびたるけしき、仙境に入りたるが如し。幾重の嶺を攀ぢ、幾片の白雲を踏みて、登り着きたる山の頂

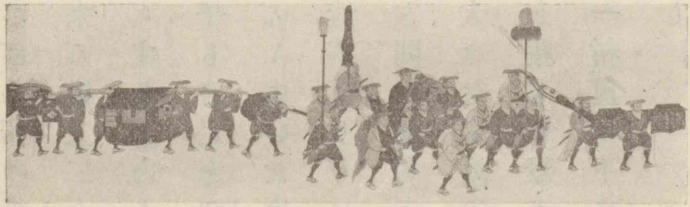
「一碗の澁茶よりもなほ濃し」

\* 藉る

元箱根 足柄下郡、蘆の湖々畔の村。



に、鏡を磨ぎ出せる蘆の湖を見初めし時の心廣さよ。あまりの絶景に、恍惚として立ちもえ去らず、木の株に坐してつくづく見れば、山更に静かにして、風吹かねども冷氣冬の如く足もとより登りて、身にしみ渡る心地せり。波の上に飛びかふ鶺鴒、忽ち來り忽ち去る。秋風に吹惱まされて力なく、水にすれつあがりつ胡蝶のひら／＼と舞ひ出でたる、箱根の頂とも知らずやあらん。遙かの空に、白雲とのみ見つるが上に、兀然として現れ出でたる富士、こゝよりもなほ二千



大目行の圖

「鏡を磨ぎ出せる蘆の湖」箱根山頂の湖。周圍約一九軒。

「秋風に吹惱まされて力なく」

「白雲とのみ見つるが上に」

\*兀然

仞はあるべしと思ふに、更にその影を深く沈めて、漣に縮め寄せられたる様いはんかたなし。

箱根驛にて午餉した、むるに、皿の上に尺にも近かるべき魚一尾あり。主人誇りかに、こは湖水の産にしてこゝの名物なり。といふ。名を問へば、赤腹と答ふ。面白き魚の名なり。是より山を下るに、見渡す限り白薄なり。

金紋先箱の行列堂々として、鳥毛片鎌など威勢よく振立てて練り行きし街道の繁昌振も、あはれ物の本にのみ残りて、草刈る童の行き通ふ小道一筋を除きての外は、草の生ひ出でぬ處もなく、僅かに行列の俤を薄の穂に留めたり。

槍立てて通る人なし花薄

(旅の旅の旅)

箱根驛 蘆の湖々畔にある村で、その東端を關所の址とする。

赤腹 淡水産、形は鮎に似て腹が赤い。

「行列の俤」

〔終〕

語 釋

- 一 自學自習の精神に基づき、本文中の語句の解釋を列擧したものである。
- 一 語意の轉用に就いては、更に辭書を調べる習慣を養ひたい。
- 一 辭書使用訓練の目的を以て、常に次の要件を見落さぬやうに注意せよ。
- イ 訓方。
- ロ 文法上の品詞の性質。
- ハ 同意語・同音語・對照語・熟語。

一 結晶の力

眞水 マミツ 普通の淡水。  
 板子 イタゴ 舟のあげいた。  
 拔手 ヌキテ 兩手を交互に水の上に抜き出して泳ぐ一種の游泳術。  
 辨別 マンベツ 見分け。  
 一手揃ひ ヒトテゾロヒ  
 二本の矢を一手といふ。二本の矢が同じやうに射られること。  
 焦心する セウシンスル 氣をもむ。

界限 カイツイ あたり。近所。

無暗 ムヤミ 何の分別なく。やたらに。

傳馬 テンマ 傳馬船の略。貨物運送用の小舟。

表白 ヘウハク 發表。

二 峠の茶屋

煤ける ススケル 煤(ス)で黒くなる。  
 屈託氣に クツタケニ つまらなささうに。いかにも退屈さうに。  
 土籠 ヘツツヒ どがま。  
 床几 シャウギ 腰か

け。

羽搏き ハバタキ。

閑靜 カンセイ ものしづかなこと。

悠長に イウチャウニ 氣長に。呑氣に。

煙つて イブツテ クスブツテ。

焦茶色 コゲチャイロ 濃い茶色。

無造作 ムザウサ ぞんざいなこと。手数をかけぬこと。

袖なし ソデナシ 袖無し羽織。

生憎 アイニク 折悪しく。あやにく。

颯と サット 俄にはげしく風の吹きたつさまにいふ。

三 草の匂

巴旦杏 ハダンキヤウ 薔薇科の喬木。  
 往還 サウクラシ とほりみち。通路。往來。  
 紫雲英 レンゲ げんげ。  
 蓮華草。  
 苗代田 ナハシロダ 稲の苗を仕立てる田。  
 案山子 カガシ  
 櫟 クヌギ  
 畝間 ウネマ 畝(ウネ)のあはひ。「畝」田や畑の中に土をうづ高く盛り、長くつゞけて作物を植ゑる處。  
 孟宗 マウソウ 孟宗竹。竹類の中で地上莖の最も大きなもの。

視野 シヤ 視力のとゞく限り。眼界。

檜 ナラ

擧げて カヘシテ

哇 アゼ

露座の石佛 ロザノイシ

ボトケ 屋根のないところにもむきだしに安置されてゐる石の佛像。

羊齒 シダ

疊椅子 タタミイス 折たしみの出来る椅子。

簡素 カンソ てるてる質素なこと。

四 お遍路さん

通路 ヘンロ 神佛を拜するのために諸國をめぐり歩くこと。又その人。巡禮。  
 山裾 ヤマスソ 山のおもと。  
 山莊 サンサウ 山の中の別荘。

靈場 レイヂャウ あら  
 たかな神佛のいますと  
 ころ。名高い神社佛閣  
 のある處。  
 通歴 ヘンレキ 廣く各  
 地をめぐり歩くこと。  
 功德 クドク 佛經の  
 語。よきしわざ。自分  
 の積んだ善行のむくい  
 が他人の身の上にも及  
 ぶこと。  
 發足 ホツソク 出發す  
 ること。かどて。  
 手廻り テマハリ 手近  
 のものの意。日用品。  
 塔婆形 タフバカタ 墓  
 地に立てる率塔婆(ソ  
 トバ)の形。  
 金剛杖 コンガウツエ  
 山伏や登山者などが用  
 ひる杖。白木で八角の  
 もの。  
 先達 センダツ 神社・  
 佛寺などに參詣する一

行の先に立つて案内す  
 る人。  
 教門 ケウモン 宗派。  
 宗旨。  
 扶助 フジヨ 助けるこ  
 と。力を添へること。  
 紛失 フンシツ 物のな  
 くなること。  
 遍照金剛 ヘンゼウコン  
 ガウ 其の光が通く十  
 方世界を照らし、其の  
 身は金剛のごとく永久  
 に堅固なることを顯は  
 す語。眞言宗にて祖師  
 弘法大師を念ずる時に  
 『南無大師遍照金剛』と  
 いふ。  
 鑽仰 サンギヤウ 徳を  
 仰ぎたゞふること。  
 争鬭 サウトウ あらそ  
 ひ。たゝかひ。  
 欺瞞 ギマン だますこ  
 と。ごまかすこと。  
 行事 ギヤウジ 定まつ

て執り行ふこと。また  
 其の事柄。  
 暗示 アンジ それとな  
 くその内容や意味を示  
 して知らせること。  
**五 新緑**  
 寒肥 カンゴエ 寒中に  
 植物に施す肥料。  
 瑞々し ミツ／＼シ 若  
 若しくつやがある。  
 頑是(クワンゼ)なし ま  
 だ幼少で、物の善惡の  
 みわけのないこと。  
 造化 ザウクラ 天地間  
 の萬物を造つた神。  
 示威運動 シキウンドウ  
 相手をたゞす爲に威力  
 を示す行動。  
 美に打たる 美を強く感  
 ずる。  
 そゝるに 何といふわけ  
 もなく。

**六 電報**  
 偵察 テイサツ 敵のや  
 うすをひそかに探りし  
 らへること。  
 勦殺 モミガラ  
 船 ヘサキ 船首。  
 凝視 ギヨウシ じつと  
 見つめること。  
 超弩級艦 テウドキフカ  
 シ 攻撃力・防禦力及  
 びその他の諸設備にお  
 いて、弩級艦以上の威  
 力を持つた軍艦。弩級  
 艦「大艦で巨砲主義で  
 戦艦のよい所のみをと  
 つて造つた威力のある  
 戦艦。一定の標準があ  
 る。  
 重鎮 ゲウウチン おも  
 いおさへ。一方のおさ  
 へとなる者。  
 巨怪 キョウクワイ 大き  
 な怪物。

肉薄 ニクハク 身を以  
 て敵にせまり近づく。  
 對抗 タイカウ 相對し  
 て互に手向ふこと。は  
 りあふこと。  
 箴言 シンゲン いまし  
 めとなる格言。モット  
 1。  
 壓搾空氣 アツサククウ  
 キ 壓搾機でおし縮め  
 た空氣。その膨脹力を  
 利用して諸機械に應用  
 する。  
 狙 ネラヒ  
 武者顔 ムシヤアルヒ  
 事にのぞんで、感情が  
 高ぶつて身體がふるへ  
 ること。  
 死を賭(ト)して 一命を  
 なげ出して。  
 阿鼻叫喚 アビケウクラ  
 シ 阿鼻も叫喚も共に  
 地獄の名。こゝしてはそ  
 こに落込んで苦しむ罪

人の悲鳴をたどつてい  
 ふ。  
 薺々 ヒシ／＼ 少しの  
 すき間もなく。  
 霄壤の差 セウジャウノ  
 サ 天と地ほどのちが  
 ひ。  
 萬事休す とるべき手段  
 が全く無くなつたこ  
 と。  
 果斷 クワダン 思ひ切  
 つて行ふこと。  
 得たりや 「しめたぞ」と  
 いふに同じ。  
 莞爾 クワンシ につこ  
 り笑ふさまにいふ語。  
 逸早く イチハヤク す  
 早く。  
 周章 シウシヤウ あわ  
 てること。うるたへる  
 こと。  
 狼狽 ラウバイ 「周章」  
 に同じ。  
 僚艦 レウカン なかま

の軍艦。  
 三色旗 サンシヨクキ  
 伊太利の國旗。綠・白・  
 赤の三色より成る。  
 揚々 ヤウ／＼ 得意に  
 思ふさま。  
 天を衝(ツ)く 勢の盛ん  
 なことの形容。  
 謙讓 ケンジャウ へり  
 くだること。  
**七 巨象のやうに**  
 そぞろあるき 何といふ  
 事なしに歩く。ぶらぶ  
 ら歩き。  
 さしやかな 小さな。  
 蝸 ヒケラシ 蟬の一  
 種。かなかな。  
 俯瞰 フカン 見下す。  
**八 修善寺行**  
 痛高い カシダカイ 調  
 子の高い。  
 質 カケヒ 地上に架

(カ) けわたして水を  
 通ずる樋(トヒ)。懸樋。  
 寛ぐ クツロク のんび  
 りとおちつく。  
 鈍色 ニパイロ 薄黒い  
 色。  
 冷酷 レイコク 人情が  
 つめたくて、むごく人  
 にあたること。  
 欄干 ランカン・テスリ・  
 オバシマ。  
 恰好 カツカウ (一)か  
 たち。(二)丁度ころあ  
 ひなること。(三)割合  
 に價のやすいこと。  
 掠める カスメル 觸  
 (フ)れ近づいて通りす  
 ぎること。  
 滅多に メッタニ むや  
 みに。みだりに。  
 驚異 キヤウイ 不思議  
 がつて驚くこと。  
 砂丘 サキウ 砂山。  
 漚へる タ、ヘル 満つ

る。  
 小徑 コミチ  
 傾斜 ケイシヤ かたむ  
 き。  
 餘韻 ヨキン 残りのひ  
 びき。  
 疎林 ソリン 木のまば  
 らに生えた林。  
 往さ來るさ ワウサクル  
 サ ヨキキ。  
 古雅 コガ 古風で風雅  
 なおもむきのあるこ  
 と。  
 庫裡 クリ 寺の臺所。  
 興味 キョウミ おもし  
 ろみ。  
 磧 カハラ 河邊の水が  
 なくて砂や石ばかりあ  
 る處。  
 老嫗 ラウウ 老婆。  
 廻廊 クワイラウ まは  
 り廊下。  
 蝨んだ ムシバンダ 蝨  
 食ひになつた。

須彌壇 シュミダン 佛  
 像を安置する臺。  
 雜僧 スウソウ 小坊  
 主。小僧。  
 草搔 クサカキ 草をか  
 き寄せる道具。  
 寄進 キシン 社寺など  
 に金品をさしあげるこ  
 と。奉納。  
 薺々と ヒシ／＼ト 強  
 く。はげしく。ゆるみ  
 のないさまにいふ語。  
 野火 ノビ 春の初に野  
 原に火をつけて枯草を  
 焼くこと。  
 不治の病 フチノヤマヒ  
 到底なほらぬ病氣。  
 さすがに やはりなほ。  
 哀愁 アイシウ かなし  
 み。「愁」は物さびしく  
 浮かぬ義。  
 患つた ヲツラツタ  
 離愁 リシウ 別れのか  
 なしみ。

連互 レンコウ 遠くつらなること。  
 法燈 ホフトウ 佛前にともすあかり。  
 入相の鐘 イリアヒノカネ 夕暮のかね。  
 鐘樓 シュロウ・シヨウロウ かねつき堂。  
 撞木 イシダタミ シュモク 鐘をつき鳴らすための棒。

ソツ 官名。  
 左遷 サセン 罪によつて低い役目におとすこと。  
 東風 コチ 東方から吹くかぜ。ひがしかぜ。おこせよ。ふこしてくれよ。送りとどけてくれよ。  
 春なわすれそ 春を忘れるなよ。  
 ゆく／＼も 行きながらかへり見しはや 振りかへり／＼して見たことであるわい。  
 琴瑟の情 キンヒツノシヤウ 夫婦間の情愛。  
 佗住居 ヲビズマヒ さびしく暮すすまひ。  
 謫居 タクキヨ 罪によりて、遠方に流されること。流された土地のすまひ。「謫」とが

め。つみ。  
 悲惨 ヒサン 悲しくいたましいこと。  
 逃散 タウザン ちりちりに逃げ去ること。  
 掃撤 サウテツ はらひのけること。  
 雪折竹 ユキナレダケ 降りつもる雪の重さに堪へかれて折れた竹。  
 一朝にして イツテウニ シテ 思ひがけもなく俄にの意。  
 食祿 ショクロク 官から賜はる米。  
 はしたない 不都合なる。あさましき。つれない。  
 権門 ケンモン 勢力のある家。  
 躍如 ヤクジョ などり立つやうに盛んにはつきりと。  
 家書 カシヨ 我が家か

らの手紙。  
 消息寂寥 セウソクセキ レウ 都からのたより(消息)がないので心にさびしく思ふ。  
 便風 ビンブウ 順風。おひ風。又、たより。  
 一〇 小品二題  
 小品 セウヒン 小品文。短くまとまつた文。  
 唐木 カラキ 熱帯産の木材。  
 蟋蟀 コホロギ 爆ぜ ハゼ 雛つ兒 ヒョッコ 飽食 ハウシヨク 腹いっぱい食ふこと。  
 肝腎の カンジンノ 大跳ねかへりさま 跳ねかへる拍子に。  
 土砂降り ドシャブリ 雨のはげしく降ること。

と。大雨。  
 壓倒 アツタウ おしたふす。おさへつける。  
 熟梅 ウミウメ 十分に實り切つた梅。  
 わび ものしづかて寂しいおもむき。  
 物ふりて 古味を帯びて。  
 こと訪(ト)ふ おとづれる。  
 一 一 ギリシャの旅  
 對照 タイセイウ 照らし合はせる。  
 狐門 コモン 狐の形した門。  
 加味した 他の意味をもつ。  
 斷片 ダンペン 切れはし。  
 貧弱 ヒンジャク 見すばらしい事。

凄味 スゴミ すさまじい様。恐しい様。  
 二 二 風鈴  
 半鐘 ハンシヤウ 小さな釣鐘。  
 こなひだ 此のあひだ。清々して 快い有様。  
 まんべんなく あまねく 廣袖 ヒロソデ 袖口の下の縫合はさぬ袖。  
 泉水 センスキ 庭前の池。

ふ。  
 衣袂 イベイ 忽(コツ)として にはかに。  
 水天 スキテン 千疊萬疊 センデフバン デフ 幾重にもかさなるさまをいふ。  
 濤の頭 ナミノカシラ 蟠る ヲダカマル なほかひなかるべしや はり、だめてあらう。  
 見所 ミドコロ 見るれうちのある所。  
 一廓 イツクラク ひとかこひ。ひとかまへ。山を蝕(ムシバ)む 雲が山にかゝつたさまをいふ。「蝕」蟲が食つたやうになること。  
 蠶 タテガミ 金字塔 ヒラミッド 心あてに あてずありやう(當推量)に。

一 散 ヒトムラ 家キノコ ぶた(豚)。あるべきにや あるのであらうか。  
 際涯 サイガイ きはまり。はて。  
 大江 タイカウ 大川。雲濤 ウンタウ 波のやうにつゞく雲。  
 露はす アラハス 塵境 ナンキヤウ 汚れた世の中。  
 一四 アイヌの部落  
 印した インシタ、シルシタ あとをつける。看守人 カンシユニン 見守りする人。番人。片言隻語 ヘンゲンセキゴ 切れぎれの言葉。境涯 キヤウガイ 境遇。愛悶 イウモン 心の悶

え。  
 喚く ソメク 大聲あげて叫ぶ。  
 唐子 カラコ 支那風の子の遊戯圖。繪巻になつた唐子遊び。  
 城府 シヤウフ 城市と官衙。  
 小徑 セウケイ、コミチ 小みち。  
 渠 ミヅ 水の通ずる所。  
 蕪地 マツシガラ 一散に。眞一文字に。とんちんかん 辻褄の合はぬ事。  
 がらんどうな 内部の全く空な事。  
 支障(シジャウ)がなくなつた さしはりがなくなつた。  
 語彙 ゴキ 多くの言葉を集めたもの。  
 敘事詩 ショシシ 事實

をありのまゝに記した詩。  
 採録 サイロク 採り上げて記す事。  
 家苞 イヘツト 家へもちかへる土産。  
 一五 盆燈籠  
 盆燈籠 ホンドウロウ 愚直 カチヨク 馬鹿正直なこと。  
 日備 ヒヤトヒ 草市 クサイチ 七月十五日の精霊祭に佛前に手向ける草花や供物などを賣る市。  
 如何にしけるにや どうしたわけてあらうか。更になく 少しもなく。情なき顔 ナサケナキカホ 悲しい顔。

この分(フシ)にては、この調子では、かこつ、こぼす。泣言をいふ。なぐりつけて、なぐり書きにして。工面類、クメンガホ、考へ込んだかほつき。息を一杯にふく、思ひ切つて言へるだけのこと、を言ふさま。さもあらう、さうでもあらう。もつともだ。肩を怒らす、いばる様子。酔餘の戯、スキヨノタムレ、酒に酔つたまぎれに、遊び半分にしたわざ。枯骨(ココツ)に膏(アブラ)す、死んだものを活かす。

一六 入江の奥  
 氣まぐれ、ふとしたはずみに思ひ出すこと。迂回、ウクワイ、遠みちをまはること。とほまはりすること。がらん洞、中が空(カラ)で、広いさま。白子網、シラスアミ、白子(シラス)といふ小魚をとるあみ。頓狂、トシキヤウ、だしぬけ。調子はづれ。あたふたと、あわてふためて。矢庭、ヤニハ、すぐさま。時を移さず。無上(ムシヤウ)やたらにむやみやたらに。波紋、ハモン、波のまやう。囃、ナトリ、あるものを誘ひ寄せるために利用するもの。墨繪、スミエ、墨だけで

描き、繪の具を用ひぬ。まとも、正面。素人目、シロウトメ、専門外の人の目。  
 一七 展望車と機關車  
 展望車、テンパウシヤ、列車の最後方につけた展望用の車輛。風光、フウクワウ、けしき。交渉、カウセフ、掛りあひ。功成り名遂げた、物事に成功して名まへを上げたこと。覇權、ハケン、はたがしらとしての權力。指導權。安閑、アンカン、何事もしないで暮してゐるさま。

原動力、活動力。餘念、ほかのおもひ。享樂主義、キヤウラクシユギ、たのしみを受けるのが人生の目的であるとする主義。世界無比、世界に類がない。  
 一八 母へ  
 精進湖、シヤウジコ、魅力、ミリヨク、人を迷はせる力。夢幻的な、ムゲンテキナ、此の世のものとも思はれぬほどに變化の多い。書齋、シヨサイ、書物をよむ部屋。「齋」學問する部屋。植込、ウエコミ、庭園に於て草や木を繁く植ゑたところ。探勝、タンシヨウ、よい

景色をさぐり求めてあはるること。歎美、タンビ、美しさに感心すること。ほめたたへること。目まぐるし、目障りのものが多くてうるさいこと。  
 川床、カハトコ、河の水が現に流れてゐる地面。河床(カシヤウ)。養殖所、ヤウシヨクシヨ、魚類を繁殖させるところ。  
 南京部、ナンキンジトミ、支那から渡り傳はつた部。支那風の部。「部」(シトミ)とは、日覆(ヒオヒ)として、又は風雨を防ぐために用ひる戸をいふ。排列、ハイレツ、ならび。つらなり。三寸角、サンズンカク

切口(キリクチ)が三寸四方の大ききであること。踏みはだけて、踏み延ばして。のさ張る、勝手にのびひろがること。肝をひやす、驚きおそれる。鐵戸、ヨロヒド、先驅、センク、さきがけ。岩組、イハケミ、岩石の組合はさつた所。緋青、コンジャウ、つや(光澤)のある青色。莊嚴、サウゴン、尊くおごそかなること。正音は、シヤウゴン。神仙境、シンセンキヤウ、仙人のすむ地。世間はなれした静かな土地。

洞窟、ドウクツ、ほらあな。一九 華  
 法句、ホツク、佛法の句。蜜味、アチ、みつ。牟尼尊、ヒジリ、釋迦牟尼尊。あてやか、上品。靈、カザリ、かみかざり。  
 二〇 陶磁器の美  
 陶磁器、土類又は石類の粉末の一種或は數種を取つて形を造り焼いた器。俗にいふ焼物のこと。感興、カンキョウ、おもしろみ。興味。機、キ、をり。荒んで来た、スサンテキキ、甚だしくあらびて

來た。燕雜、アザツ、亂れて秩序がないこと。餘裕、ヨユウ、ゆとり。窯藝、エウゲイ、陶器を製造する技藝。趣味、シュミ、物事の風流を(あは)ひを(解)する力。豫知、ヨチ、まへもつて知る。神祕、シンビ、靈妙不可思議ではかり知ることの出來ぬ秘密。背景、ハイケイ、周圍の様子。宗教的思想、神佛を信仰するやうなかんがへ。試練、シレン、信仰又は決心のこころみ。ためし。没入、ボツニフ、はまる。功利、コウリ、功名と利益。

剎那、セツナ、ごく短い時間。瞬間。物質的結果、物欲の満足を第一としての結果。  
 二一 森の繪  
 小春、コハル、陰曆十月の稱。春のやうに暖かな季節だからである。薄ら寒く、ウスラザムク、何となく寒さうに。中景、チュウケイ、遠景と近景の中間。中程に見える景色。逞しい、タクマシイ、強く丈夫なこと。霜にさびて、霜のために衰へて、「さぶ」荒ぶ。得もいはぬ、いふに言はれぬ。何とも言ひやうのない。豆大、ツダイ、豆粒ほどの大きさ。灌木、クワンボク、木本

莖ではあるが丈の低い植物。寧ろ、ムシロ、どちらかといへば。鴨、ヒヨ、ヒヨドリ。臨畫帖、リンガワテフ、畫の手法。寒竹、カンチク、寒中に筍(タケノコ)を生ずる竹。紫竹(シチク)。蟲抑へ、ムシオサヘ、子供の昂(タカ)ぶつた精神を鎮めること。木枯、コガラシ、冬の初に吹く風。風。枯菰、カレコモ、枯れた眞菰(マコモ)。牧牛舎、ウシゴヤ、ボク、ギユウシヤ、牛小屋。漂浪、ヘウラウ、たゞよひさまよふこと。さすらふこと。古ぼけ、古く、きたなくなつた。

三三 箱根路

箱根路 ハコネチ  
行脚 アンギ 諸處を  
徒歩てめぐること。  
烟霧 エンム もや。  
模糊 モコ 物がはつき  
りと見えぬさま。ぼん  
やり。  
眞面目 シンメンモク  
ほんたうの味。  
まだき 朝早く。  
夜もすがら ふどほし。  
一天 イッテン 大空全  
體。  
しるべ 道案内。  
かしまし(喧し) うるさ  
く聞える。  
かたばかり しるしだ  
け。形式ばかり。  
千仞 センジン 初は高  
さ・深さの單位。周尺  
の八尺又は七尺。  
樵夫 セウフ きこり。

秋さぶ 秋がふけて一種  
の趣を生じてくるこ  
と。

鏡を磨ぎ出せる 鏡をと  
ぎあげたやうに平らか  
てキラ／＼光る。

恍惚 クワウコツ 心を  
それにうばはれてぼん  
やりすること。

立ちもえ去らず 立ち去  
ることも出来かけて。

兀然 コツゼン 高く聳  
え立つさま。

午餉 ヒルゲ ひる飯。  
誇りに 自慢さうに。

金紋先箱 キンモンサキ  
バコ  
鳥毛 トリゲ 槍の頭に  
つけるかざり。

片鎌 カタカマ 鎌槍の  
一種。  
練る ネル 靜かに歩む  
こと。  
物の本 モノノホン 書

物。  
倅 オモカゲ

(終)

附常用漢字表

千八百五十九字(臨時國語調査會決定表)

【一】一丁七丈三上下不  
世丙並【丁】中【、】丸  
主【ノ】久之乏乗【乙】乙  
九乞也乳乱亂【丁】了事  
【二】二五五井【一】亡交  
亦京亭【人】人仁仇今介  
仕他付代令以仰仲伴任伊  
伏伐休伯伴伺似位低住佐  
何余佛作伸使未來)例侍  
供佳依悔侯便係促俊俗  
保俠信修俳俵俸併併)倉  
個倍倒候借倫俱飯(假)偉  
偏停健側偶傍傑備催働傳  
債傷傾僅像僚偽(僞)僧價  
儀億儉償優【儿】元兄充兆  
兕先光兌克免兕【兒】入

入内全両(兩)【八】八公六  
共兵具典其兼【口】冊再  
【シ】冬冷涼准凌凍【凡】  
凡【レ】凶出【刀】刀刃  
分切刊刑列初判別利到制  
刷券刺刺刻則削前剛副  
割創剗剗劇劍剗劑【カ】  
力功加劣助努効勅勇勉動  
勤務勝勞(勞)募勢勤勳勵  
(勵)勸(勸)【フ】包【ヒ】化  
北【レ】區【十】十千升  
午半卓卓協南博【卜】  
占【口】印危却卵卷即【レ】  
厄厘厚原厥【ム】去參(參)  
【又】及友反叔取受【口】  
口古句叫召可史右司各合

吉同名后吏吐向君吟否含  
早吸吹告周味呼命和咽哀  
品咸員哲唐唱商問啓唯善  
嶺喜喪單喫嗣嘉器噴嘖嘖  
(嘖)【口】因四回因困固固  
(國)團(團)園(圓)圓(圓)團  
【土】土在地坂均坊坑坪垂  
型埋城域執培基堀堂堅堤  
堪報場塔塗塵境墓塀塀塀  
增墨墮壁壇壘壞壞【土】  
士壯壹壹壽【夕】夕夏  
【夕】夕夕多夜夢【大】大  
天太夫央央奇奉奏契奔奢  
奧奪獎奮【女】女奴好如  
妃妊妙妨娒妹妻姉始姑姓  
委姦姪姪姻姦威娘媼媼婚

婦娼媼媒嫁媼嫌嫌【子】  
子字存孝季孤孫學學【子】  
冗冗)宅守安完宏宗官定  
宜客宣室宮害宴家容宿寄  
密富寒察寢寢寢寢(寢)寢寫  
寬寶寶【寸】寸寺封射將  
專尉尊尊對導【小】小少  
尙【尤】就【尸】尺尼尾  
尿局居屈屈屋展層履履  
(屬)山)山岡岩岳岸岬峯  
島峽崇崎崩【川】川州巡  
巢【工】工左巧巨差【巳】  
己【巾】巾市布帆希帝帥師席  
帳帶帶帶帶帶帶帶帶帶帶  
于平年幸幹【幺】幻幼幾  
【尸】床序底店府度座庫庭

(一)本表にない漢字は假名で書くこと。  
(二)固有名詞には本表にない文字を用いても差支ない、ただし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること。  
(三)代名詞、感動詞、助動詞および助詞はなるべく假名で書くこと。  
(四)外來語は假名で書くこと。









Right page of an antique book with a faint grid and various markings.

The right page contains a faint grid structure. In the upper center, there is a circular stamp with the Chinese character "書" (Shu, meaning "book" or "writing").

On the right side, there is a vertical column of text, possibly a list of items or a table of contents, with some characters that are difficult to read due to fading. The characters appear to include "文", "學", "振", "館".

Below the grid, there are several lines of text, including what looks like a date or a reference number: "五五八八".

The page also shows signs of age, including some smaller water stains and discoloration.

三年西組

福永昭恵美